
シフトキィにクロノバ

富美霞一等星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シフトキイにクロノバ

【Nコード】

N8831A

【作者名】

富美霞一等星

【あらすじ】

それ以前、私は何かにつけて完備する事をこそ得意であったが、推測はあまり上手ではない。先見の明にかけて卓越しているのは寧ろ彼女の方だ。兎に角、マンホールからの落下に備え道を歩くほど私は神経質ではない。加え、彼女の様に未来を描く事も私は出来ない。だからマンホールから落ちたのである。

その他に私が存在した（前書き）

物語の静止には早過ぎる。

物語の制止には遅過ぎる。

蟠りの解答には早過ぎる。

蟠りの解凍には遅過ぎる。

真実の証明には早過ぎる。

真実の照明には遅過ぎる。

己の精察には早過ぎる。

己の省察には遅過ぎる。

その他に私が存在した

ピンクの白ウサギが物凄い形相で走ってきた。無論、人間の私がウサギの顔を一目見ただけでそのウサギの心底を察する事なんて出来る訳がないのだ。しかしそのウサギがチョッキを来て、時計を持ち、二本足で走り、

「どうしよう！どうしよう！遅刻しちゃうぞ」

などと、人間語を、正にそれが至当なのだぞと言わんばかりに喋るものだから、形相の云々などという問題以前に、それが物凄い勢いであった事は一目で解る。

その時の私といえば、大木が作る木漏れ日の下、退屈という贅沢な苦悩を脳髓の片隅に供えつつも、いいや、それ故、暇で暇で忙しかったので、比較的、静寂と形容しても差し支えなかった平穩を破るウサギの足音を、意識しない程度に聞くだけだったのである。風のように。こうすることで、有意義な暇を私は満喫出来るのだった。

「あー。……、勿体無いね。もしもあのウサギが、ピーピー鳴くだけの四本足のウサギだったら、少しは相手してあげられたのにね」

と、私の隣に寝転がっていた彼女が言った。その言葉が、あまりに私の心中の的を射るものであったために、まるで、私の意中を代弁したかのように思えた。

寝転がった体を私の方へ転がして細い手で支えて起こし、彼女は私を覆うようにする。

それは、一方通行の以心伝心。だから、予定調和の意志相通にもならない。

よって、今も私は彼女の思惑が読めないのである。

「あれ？追いかけないの？それじゃあやっぱり、代わりに僕が行こうか」

と、そう言われても、こうも体を拘束されたのでは動けないだろう。が、あんなのを追いかける気などそもそも毛等無かったので、「いいよ、そんなの、全然珍しくないしね」

とだけ言って、彼女に身を預ける事にする。それでも、彼女は言った。

「だからだよ。二本足のウサギを追いかけるなんて常人のやる事だけど、たまにはいいじゃない？」

筆順を普遍となぞり続ける様に。

彼女は、平凡が珍奇な少女。全てから逸脱された存在だった。

何故、凡庸は、異常を追いかけるのだろう。

憧れか、妬みか。防衛か、攻撃か。

そして、彼女が私を追いかける。

否、そうじゃない。それは全く違うというものだった。

彼女が私を追いかけるように仕向けたのは紛れも無い私だった。謀略だった。単に目的の企みの一環の謀略だったのだ。

私は、彼女を捕まえたかったので、向こうから近づくように仕込んだ。それだけだ。

普通の憧れてやつだ。普通の妬みってやつだ。普通の防衛ってやつだ。普通の攻撃ってやつだ。

だから私は、彼女に言ってやったのだ。

「お前って、釣られやすいよな」

だから、彼女は私に言ってやったのだろう。

「ん？そんなこと無いよ。釣られてやってるだけ」

だから、だから、だからだからだから。

「だから、釣られやすい奴だなんてさ」

「ああ、まあね。でも、僕なんて皆怖がって釣ろうとは思えないよ」

「……そりゃそうさ。お前を釣ったら、逆に喰われかねない」

釣った魚は大きい。

大きすぎて、逆に釣った魚に根こそぎ喰われる。

「まあ、それが、最も自然な食物連鎖ってものだよね」

彼女は、言った。

今度ばかりは、私の内を曝け出すように。

そうやって、ウサギは穴に落ちていったんだ。

私の全細胞を代表するように。

ウサギは不思議の国へ。

これが、エピソードなんて、当初は気付きもしなかった。だから
きつとウサギも私がエピソードだったなんて知らなかったに違いな
い。

アンティシペーションに私（前書き）

変幻自在の罪作りか。

完全無欠の罪滅ぼしか。

彼女にとってこれは必然らしかった。

随分と迷惑な必然もあったものだ。

アンティシペーションに私

私は、極力を避けるべく極力を奮い、怪我を恐れて満身創痍となる種の人間であり、又、不幸を免れる事にこの上ない幸福を感じる人間でもあった。

なので、常にあらゆる不祥事が思索に先立つ。

これは心配をしているのではなく、純粹に私が、何事何者何故に對して心許無いだけだ。

それに、私はちっぽけな事で思い煩う程馬鹿でも阿呆でもない。苦渋するのではなく、信賴をしないのが是のポイントである。

さて、しかし私は予測出来なかった。

私がマンホールから足を踏み外し落ちるなどとは。

それ以前、私は何かにつけて完備する事をこそ得意であったが、推測はあまり上手ではない。先見の明にかけて卓越しているのは寧ろ彼女の方だ。

兎に角、マンホールからの落下に備え道を歩くほど私は神経質ではない。加え、彼女の様に未来を描く事も私は出来ない。だからマンホールから落ちたのである。

酷い事に、そのマンホールは四角であった。私は、蓋と共に落ちたのだった。

さて、人体の各部において、一番の質量を誇るのが頭部である。故に、その規定以上の高度から落下したのであろう私の体は、予想通り頭上が真下を向いていた。

少なくとも理解できるのは、私が非常に危険な状態にある事だ。視界が暗かったのはしかし、事態に頭が混乱して視力が著しく低下した訳ではなく、単に此処が下水道だからである。

そして私は其の俛下水に頭から叩きつけられた。が、強く、叩き

つけられたものの着地点が水上であつた為、痛みは然程無い。

寧ろ、不可解なのは、下水の水嵩が想像以上に高い、即ち底が深い事、一面にそれが広く亘っている事、そして、下水が想像以上に澄んでいた事である。

水面下で思う。正しく、上下、そして縦横に大きい、これは海のような下水なのだ。

それにしても如何した物だろうか。

好奇心に乏しい私は無論、是までに下水に浸る経験など一遍たりとも無い。だから知らなかったのだが、てっきりマンホールの下には人間が其処を行き来する為に備え付けられた取っ手があるものだろうと思っていた。ところが、そんなものは全く見当たらない。

自粛。なんて事はなかった。知識やそれを装う得手勝手な既定、固定観念に裏切られる事に私は慣れている。

これこそが正真の慣性というものなのではないだろうか。

よく見回してみれば、此処がホールの様な大空間となっていたのが解った。納得。これでは取っ手など付けられない。それにしたつて、マンホールという入り口があるのだから、同じように、出口もある筈である、それが筋というものだ。

私は下水に何時までも浸っている訳にも行かないので、一先ずカエルの形姿で水路の脇まで泳いだ。数十メートルという所で端に到達すると、歩行用にとコンクリートで出来た歩道を発見した。私は漸く地に足を付ける事が出来る訳である。

と、私が安堵し、歩道に手を掛けた瞬間。

道が手に触れたか否か。そして突然。

前方がぼわんと、開けた。

眼識がそうとらえるのも無理は無い。辺りが余程暗かったのだから。

歩道は、下水の海を突き抜けるように、続いていた。
明るくなったからそれに気が付いた。

もう、首肯したくなる程。
目が少し、痛い。頭以上に。

カミソリに殺人鬼（前書き）

証明が為に仮説の存在が認められると言うのならば
紛れもない、この私こそが仮定の一員なのだ。

カミソリに殺人鬼

突き抜ける通路は地平線の様に長く続いていた。先刻私が泳いだ海などとは比べ物にならないぐらいに。

伴い、地下道は思いのほか長々としているのだなという感懷を抱いた。しかし、それは所詮、唯の風物、景物でしかない。

それでは何が唯の風物では無いと言えるのだろうか。それは、その通路の両端には宙を舞う立方体であった。敷き詰められるように列を成したそれらは様々な形を造っていて、グルグルと回り、浮き沈みしながら、遍く並べられた蛍光灯の如くそれぞれが光を放っていた。

光景を創っていた。それだけに異観である。

そして、何より異端しているのは、その蛍光灯群に混じり空中飛行を勤しむ人の影がある事であった。

私は声をかけた。飛んでいる彼に聞こえるよう、大声で。

「其処の君。何をしているのか」

彼はすると、するりするりと浮かぶ蛍光灯を潜り抜け、私の前へ姿を現した。

「やあやあ。見ての通り、空を飛んでいるのだよ」

こうも、当然の事を言われてしまえば、まるでそれが容易であるかのように聞こえてしまうが、どこをどう見てもニュートンの物理法則を易々と無視している。これでは、ニュートンが浮かばれないというものである。

「君こそ、何をしているんだい」

と、彼が私にこう問うた。そこで私はまだ水中に居ることに気が付く。成る程。私が空を飛ぶ彼を不可思議と思うように、彼も、私が泳ぐのが不可思議なのだろう。

私は言った。「やあやあ。見ての通り、水中を泳いでいるのだよ」

と。

彼は、それで納得した様で、二三度程大袈裟に頷いてみせ、「それならば、陸中も水中も空中も僕にとては何の違いすらないが、こは二人、地に足を付け暫し話しに耽るのも悪く無いであろうと思うが、君はどう思う」と、言う。私に水から出て来いと催促するのだった。どの道私は、そのつもりだったので、道にべたりとつけた掌に力を込め、地へと上がった。彼も、それを見て空から降りてくる。

「早速だが、何を話そうかね」

と、彼は首を傾げるが、確かに私は陸にこそ上がりたかったが、彼とは四方山話も与太話も無駄話も土産話も、ましてや人が空を飛ぶ御伽噺すらする気はなかった。そうやって首を傾げるぐらい悩むのであれば、別に話さなければ良いであろう。しかし、彼は続けた。「僕はここら辺じゃ殺人鬼で通っているんだ。でも、今まで殺した人数が一人しかいない。これでは殺人鬼失格じゃないかと、僕はそう思うのだけれども、君はどう思う」

「それじゃあ、殺人鬼失格と感ずるならば、もっと殺せば良いではないか」

「嗚呼。君の言う事は最も道理に適っているね。しかし僕は現在、剃刀を持って人を襲うのが毎日の習慣なのだけれども、それでも中々殺人に成功しないんだ。さて、君はどう思う」

「何故、剃刀なんだい。世には、もっと殺人に便利な道具が山ほどあるではないか」

「そうさ。だけど、殺せなかった。初めにやったのは、ハサミを女子高生の喉に突き刺すというものだった。しかし、その女子高生は死ななかった。そりゃそうさ。僕だって喉にハサミを突き刺されただけじゃ死なないもの」彼はコツコツと僕の周りを歩き「次にやったのは、ビニール袋に婦女を詰め、土に埋めるというものであった。しかし、出てこれないように目を皿にして見張ったのだけれども、……三日見張ってから掘り返してみたのだけれども、矢張りその婦

女も死ななかつた。そりゃそうさ。僕だって土に埋められたぐらいじゃ死なないもの」歩いて僕の背中に立ち「つい最近やったのはクビキリだった。千二百人の首を大型の刃物で切断した。しかし、首を切っても、奴等は皆生きていた。そうさ。そうさ。その通りさ。僕だって首を切られたぐらいじゃ死なないもの」歩いて歩いて歩いて、再び私の面前へと戻った。自然と、私と彼が対峙する形となる。

どうやら、地下道の人間とは、首を刺されても、土に埋められても、首を切られても死なないらしい。虚栄とは違った、虚像とは違った、虚心とは違った知識が、私の中で又一つ増えた。明日になったら、私の記憶の一つが忘却されているに違いあるまい。

「しかし、だ。ある日、殺せたんだ。剃刀で。さあ。どう思う」彼は、ポケットから一つの剃刀を取り出した。それは小型の、ホテルの洗面所に置かれているようなものであった。

「さてね、如何なる凶器たちが、剃刀一本に勝てないのか」

私はそれだけ言って、次の言葉を待つ。彼は、一つ咳をして、話し始めた。

「あの日は、今から七百五十年前頃の事だったのだけれど。ここらで先程の様に空中浮遊を楽しんでいたところに、人が倒れていたのを私が発見した。その人は頭から流血していて途轍もなく弱っていたのだ」

「その人、何か言っていましたか？」

「嗚呼、上から落ちてきただの何だの言って、僕に助けを求めたよ」

「そこを、殺したんですね」

「そうだ。その時不運にも私は凶器を持っていなかった。しかし、彼の衣類の中から剃刀を見つけてね、それで刃を当てて、思いっきり引いた」彼は、頭上を見上げた。「虚しくなるほど呆気なかったよ。今まで僕がしてきたことはなんだったんだってさ。それで僕は、この世で二千二百七十年ぶりの殺人に成功した。だからここら辺じや結構有名人なんだよ、僕」

「良く、解りました。あなたは偉大ですね」

と、私は見も蓋も無いことを言葉にした。彼はありがとう一言、それから、上を見続けていた。

私は、ふとそこでちよつとしたことが気になって、聞くか聞くまいか少しばかり悩んだのだけれども、不鮮明な事があると、私は夜も眠れないような人間だったので、言った。

「その、二千二百七十年前の殺人は、どんなものだったのですか？」

すると、それを聞くと、否、聞き終わるか終わらないか、彼は、手を喉に当て、苦しそうに喘ぎ出した。目は飛び出るほど見開かれ、背を命一杯反らし、そして、後ろに倒れる。

「あの、大丈夫ですか？」

私の言葉など聞かず、彼はじたばたと、手足を大きく降り始めた。俗に言う、玩具を強請る幼児というものだ。それから、至上苦しいのだろう、体は痙攣を起こしかけていた。

暫くその状態が続いたが、痙攣は徐々に大きくなってゆき、対して声は徐々に小さくなってゆき、最後に大きく飛び跳ねた後に、電池が切れた。

電池が切れて、彼は本性を現した。

屍骸の肉が高速で溶解してゆき、骨が縮小してゆく。

残ったのは、微動すらない魚。

これは、今日、一番に頷ける結果であった。謎は大方露となる。

本性の露見がここで可能となった。謎の有無が確証された。

それは存在したのだった。同時に、それ自体が顕著となる。

あなたは魚だったのですね。そう。魚である以上、此処は紛れも無い川となり、そして紛れも無い海となる。それ以外では無くなる。嗚呼。でも、あなたが死んだいま、矢張り此処は下水なのですね。それじゃあ、私の愚考は、間違っていないかった。良かった。良かった。

それでも、私はあなたが鳥だと思っていたのですよ。あなたが飛んでいたものですから。仮にそうだとしたら、あなたは魚を捕る鳥なのでしょう。それじゃあ、矢張り此処は川か海ですね。嗚呼、そうか。死んだから変わらないのか。

左様なら。剃刀男。

それから、私は、幻覚とも言い得る、その道を進んだ。

林檎が木から落ちるのではなく、土から生える世界で。

ハピネスに女王蜂（前書き）

『他人の幸せを共有するべき事は真理かもしれない
でも、他人の不幸をわざわざ共感する必要はないだろうか？』

他人に、そう口論する時点で、
上記の論が矛盾している。

ハピネスに女王蜂

翌々考えてみる。剃刀男は確かに消失したが、あれは死に内含されるのであろうか、と。

もしそうだとすれば、私は世で数十年ぶりの殺人に成功した訳だ。皮すらも、肉すらも、最早剃刀男には残っていなかったと言うのに。御免なさい、と言うより勘弁してくれ、剃刀男。不可抗力だった。……、と言うより不可摩擦力。造語にもならなければ、戯言にもならない。

辛うじて洒落にはなったけどね。

そもそも今に至っても私は彼の死因が今一理解出来ない。出来ない以上、私が自覚がないまま同じ過ちを繰り返し、二人目、三人目と殺し続けてしまう可能性があるのでないだろうか。これでは、殺人鬼を志した剃刀男が可哀想である。私は大変な事をしてしまったのだろうか。

と、ここで私は思案を急遽停止する。事態が深刻という訳でもないのに、自分一人で悩む必要など無いのだ。是は不要な考慮というものである。

それこそ二人目が死去した時に苦悩すべきだ。

それこそ事態が深刻になった時に苦悶すべきだ。

自体が決壊する時こそ悩み悶え苦しめ。

綿蓄しずるの言葉である。私は久しく、彼女に会いたくなかった。久しくとは、久しぶりに彼女と会うという事ではなく、彼女に会いたいと思うのが久しぶりだということだ。

私は、大きな溜息を吐いた。有酸素運動後には決して出来ないぐらいに。それから、本日で六十二回目となる岐路に突き当たり、何

も考えずに道を選出し、再度進み始める。どうせ行き先など分からない。目的地が存在しないのならば、悩む必要は無い。

悩む必要がある瞬間に私はお会いした事が無い。だからこれからも無いだろう。

それ以上の岐路はなかった。行き止まりがあったのである。

しかし、そこには蜂の巣があり、それを見て私は一驚を喫した。私が縮んでしまったのではないかと悩んじゃうほどその蜂の巣が大きかったのである。

私が圧倒されていたところ、巣から出た働き蜂であろう一匹が此方へぶんぶんとして飛んできた。あまりに唐突であったので、身構えるより早くその蜂達は私の前までやってきて、そしてゆっくりと着地をする。

豪壮に住む蜂もいたものだ。と、初めは思ったが、その蜂を見て私は納得した。彼は私より二回り三回りも大きい、建物に見合うサイズであったのだ。私の体は本当の本当に縮んでしまったのだろうか。

その蜂は、礼儀正しく一礼し（会釈ではない、軍隊のよくやるようなあれ）そして、私にこう言った。

「お待ちしておりました。どうぞ中へ」

私はこれまでで蜂様をお待ちさせるような約束をしたことがなかった。ので身に覚えが全くなかった。それとも、私が単に失念しているのだろうか。そう思えるぐらいその蜂は真剣な面持ちである。

何時ぞやのウサギもそうだが、この世界の生物は意志相通がとても上手である。

人間の、特に彼女より優良。

「あの、中へ入らないと言ったら、どうなりますか？」

私は蜂に訊ねる。

「刺します。ずばっと」

蜂は正直に答えてくれた。

私は、初めて蜂の巣の中へ入った。無論、私に浮遊能力など無い。進入経路は元々設備されていたエレベーターであった。人間にとっても優しい建築物である。

「この部屋です」

エレベーターで登り、巣の周りに作られた足場を渡り、私は一つの部屋まで案内された。入室してみると。

「御機嫌よう」

「……」

女王様がいた。巣の素材で出来た大椅子に腰掛け、大量の装飾品を身にまとい、ふわふわとしたセンスを片手に持つ。頭には輝く冠。実の所を言えば、一寸引いた。

「どうしたのか、早く私を不幸にしておくれ」

「どうやら、どうもしなくても、私はこの女王を不幸にする為にここへ招かれたらしかった。」

「わたくし、産まれついでに女王で御座いまして。一度も不幸な目にあったことはありませんの」

「見受けられます。嫌というほどに」

「どのようにしたら、わたくしは不幸になれるのですか？」

しかし、残念ながら女王蜂のその表情は激しい剣幕の類のものであった。本気である。痛いほど汲み取れた。

行き過ぎた優良は怖かった。

「そうですね、不幸になる方法ですか」

と、私は簡単に答えられるものだと思ったが、しかし、これまで不幸から逃げ回ってきた私には難解な質問だ。

そう。これまで、自発が引き金となった決定的な不幸が私には無かった。

私は、意外に幸福だった。

女王蜂は私を強く見つめていた。舐めるように。

もはや睥睨の域だ。

私は、悩まない。そして、この種の問題とは計算で編み出すものじゃない。

直感で、瞬時に。応えるものだ。

「女王様、これからもずっと、そう思い続ければ、いつかきつとあなたは不幸になります。昨日より今日。今日より明日。日に日に、強く。どんどん強く。気が付けばあなたから幸せがなくなっていますよ」

取り返しが付かなくなるほどに。

隘路に足取りを取られる内はまだ良い。

そこから誤って出てきてしまつて、そして、もう二度とその路に戻れないと知った時。

自発が引き金となつた決定的な不幸。

しかし、女王蜂はその解答に頷けない様子だった。確かに、後々しこりが残る様な一言でこそあつたかもしれない。

私はそもそも解答用紙を目指す人間でもなく、又、それを自発的に、能動的に作るような人間でもない。

答えすら目指さない愚人だ。

今まで、殺人鬼を目指さなかつたように。

しかし、それでも私は、こんな偽善事を言ったことはなかつた。

この引き金は、どこにあるのだろうか。

女王蜂、働き蜂、隘路、岐路。

剃刀男、海の様な下水、マンホール。

優良でなくて、答えを編み出すのが大好きで、巧緻に先見の明を操る、人間の彼女。綿蓄しずる。

否、引き金というよりか、ゼンマイと言った方が私にはしっくり来る。私はいつだって受動的だから。

結局私は、その場を二言三言で抜け出すと言う姑息な手で、巨大な蜂の巣から脱出を図った。しかし、巧言など所詮私が吐けるも無く、女王蜂とはしたくもない一方的な世論の話をして、その内容が蜂の社会問題であったところで私には返す言葉のレパートリーも無く、持ち合わせも無く、脱出手段も無く。やはり、受動的な私らしく、忍耐強く話を聞き続ける。そして最終的には、突然私の前で女王蜂が昼寝をし出した所で、漸く私の役目が終わりを告げた。告げられた。働き蜂の口から。お疲れ様でした、と。

「良い話をされていましたね、昨日より今日、今日より明日。私もこれで仕事が頑張れるというものです」

女王蜂の部屋の壁には耳があるらしかった。障子は無かったが、どこかに目も付いていたのだろうか。

「蜂さん、蜂さん。それは違いますよ。明日より大事なのは今日です。今日失った命は明日に先延ばし出来ませんから。昨日の不幸を翌日に忘れる如くね」

私は最後に、社交辞令でもなく、偽善でもない。有りのままの本心を言葉にして、その場を去った。

つまり、今までの岐路を、再び一から歩み直さなければならないのだった。

私は、昨日の不幸が言えない。

女王蜂は、昨日の幸福が言えない。

クラウンにウサギ（前書き）

戦いは強者と弱者ではない。

戦いに狩るも狩られるも無く、ただそこにあるのは、流れの速い川。

相手の未来を潰して土台を作り、自分の未来をその上に置いて、川を上手に渡る必要がある。

クラウンにウサギ

結局のところ思うのは。自我の体を一番良く知る方法は、他人の目からその実態を口で伝達して頂戴することなのだ、ということであつた。しかし手前勝手なこと、我が身に直接関係する問題である故、確証の仕様が無いことに歯痒さを感じずにはいられないのである。

自分の身を大きく見せて敵を威嚇する生物は知っている。しかし逆となれば、あまり耳にしない。

私の体よ。手前は小さくなってしまわれたのか。

しかしながら、どこでどのような手法で突然変異が勃発したのか。処方の施しようは存在するのだろうか。などとうろたえるのは、矮躯の縮小が堅固たるものとなったときにこそするべきだ。

そんな思案を巡らせ、私は云十度目の選択肢に出会った。右に行ったものか左にいったものかと悩む事はないが、こうも一度に沢山の採択に迫られると、己の直感、第六感に自信の無い私は幾分狼狽してしまう。

こんなとき、綿蓄ならどうするだろうか。……と考え、その思考をすぐに切り替える。

私は否、人間が彼女の真心を察するなどとは、笑い種だ。

そして、右にいざ前進せよという時。

私は、背後から不意打ちを喰らった。

体当たりだったと思う。何かが猛進して、私を攻撃した。

少しだけ空を飛んだ。

私は、その思い掛けない状況に、咄嗟に反応する術もなく、出来ることといったら、地面と顔面の衝突を両手を突いて防ぐことぐらいだった。

「見つけた！」

と、背中から若い女子の声を浴びた。私の現況と言え、地面と水平の有様であった。その為、恐らく彼女は倒れた私を見下げているのだろう。あまり気分の良いものではない。

第一、少女から指名手配されるほどの前科が私には微塵もない。

彼女はというと、私を見つけたのがよっぽど嬉しいのだろうか、ぴよよんと地面を飛び跳ね、やったやったと、歓喜の声を上げ、仕舞いには突っ伏した儘の私の周りを、楕円形に走りまわるのであった。

「何奴じゃ！」

私は、うつ伏せた首を少し上げて唸った。

彼女は走るのをやめ、私の前でしゃがみ込み顔を近づける。

「俺様はウサギだ。大樹でお前を見たが覚えてないか？」

そこで、私は意外な再会に嗚呼と声を漏らした。

言葉を失った。

「お前を探していた。お前に話がある」

「丁度良い。私もお前に聞きたいことがある」

「待て、俺様が先だ」

「待て待て、私が起き上がるのが先だ」

この有様で話をされると、こちらとて辛いものがあつた。まるで、大木での私と綿蕾の様で。

私は、立ち上がった。胸の高鳴りは止まない。私を見て、しゃがんでいた彼女も立ち上がる。

彼女は私を見上げた。私は無言で頷く。

「お前は、俺様の仕事。この世界の俺様の役割を奪った」

実は差し当たり、身に覚えがあつた。

「それは、女王蜂への手当てかな」

それを聞くと、ウサギは赤かった頬を更に赤くし、大きい目を更に見開き、命一杯叫んだ。

「そうだ、よくも俺様の存在を横奪してくれたな！」

確かに、私は彼女の存在を奪った。言葉を変えれば、彼女の体、意識、命を根こそぎこの世から持っていたということになる。結果的にはあるが。

「仕方がないだろう。成り行きばかりだったのだから。それにあのままだと刺されるところだったからね」

そこで、彼女は一息。

「間違える蜂も蜂だが、お前もお前だ。一体全体女王に何を吹き込んだんだ」

特別なことを言った覚えはない。偽善は吐いたが、あれも所詮は社会の平行線。即ち一般論にしか過ぎない。

「別に、変なことは言っていないさ」

「それじゃあ、何を使った、手品か詐欺か魔法か？」

「さて、事実の隔絶と、幻影は多少駆使したかもしれないな」

これは、私の言葉じゃない。無論、綿蕾だ。賢明な方言だと思う。見事な戯言だ。

「なんて甚だしい奴だ」

全く以って同意だ。綿蕾は殊の外甚だしい。

「どうすんだよ、お陰で俺様は暇を頂いてしまったではないか」

ウサギは其の俣地面にへこたれ、俯いてしまった。

私にとってみれば、暇で暇で暇な一時こそ、何者にも勝らぬ欣快の至りであるというのに、どうやらこのウサギの場合は全然違うようだ。

こうも、しゅんとされてしまうと、こちらとてばつが悪いというものだった。

「それならば、私が仕事をやろう」

私は言った。それを聞いて彼女は顔を上げる。

「報酬は？」

強烈なストレートパンチ。

「一寸待て、私は女王蜂から報酬など受けた覚えは無いぞ。無償で

いいだろう？」

ウサギは容姿にそぐわない呆れ顔をした。

「いいや、お前はちゃんと貰ってるよ。右腕の上腕、肩より少し下のところに付いてる」

私は、即刻上着を脱ぎ、体をくねらせて肩を見た。

自我の体を一番良く知る方法は、他人の目からその実態を口で伝達して頂戴することなのだ。

肩には、針で刻んだ様な紋章があった。赤と白の渦で、無秩序に円を描いたマークであったが、綺麗な模様を成していた。しかし、皮膚に付着している様子で、手で拭っても色は落ちない。

「なんだ、これは」

「報酬だ。それはお前の世界で言う、札束だよ」

なるほど、これでお金を落とすことも、盗まれることもない。…じゃなくて。

「どうやったら取れるんだ？なんならウサギさんにくれてやってもいいんだが」

「無理だ。一度何か物品を購入しない限り、それは消えないよ」

「そうか。それじゃあ、何か欲しいものは？私が変わりに買おう」

「それも不可。この世では、一度手にしたものは売却されるまで、持ち主のもの。それを他人に明け渡す際には必ず金銭の取引が必要になる。それをしなかったら、貰い受けた方は窃盗罪となり、一生捕まる」

殺されることは勿論ないけどね。と、ウサギは一言。無論、殺さないのではなく、殺せないのだ。剃刀男の如く。

「……」

「……」

嫌な沈黙。何か上手い手段はないものだろうか。

「私がウサギさんに仕事を与えたとき、その報酬としてこの紋章を

明け渡すことは出来ないの？」

「出来る」

ウサギは短く答えた。出来るのか。

「それじゃあそれで行こう。なんだ、ちゃんと報酬は払えるじゃないか」

「少ない」

苛烈な右フック。

女王蜂から貰い受けた報酬が少ないだと？元はと言えば、この仕事は彼女のものだったのではないのか。

何か可笑しい。

「少ないことはないだろう」

「じゃあ、不足。量の欠落。質の欠如。」

厳格なアップースイング、そこからコンビネーション。

「落ち着け。ウサギさん、簡単な仕事だから内容だけでも聞きたまえ」

「お前の言う事はもう解っている。この世界の脱出方法を伝授しろ、だろ」

凶星だった。この世のウサギは賢い。私は肯定する。

「駄目だ。足りない」

「情報に値が張るのか」

「違う、お前単独では不可能だ。しかし俺様が従属として救援すれば何とか相成る。が、決して容易ではない。万能な俺様が補助してこそだ」

「だから、か」

そうだ、とウサギは言い、身軽に半回転でジャンプ。私に背を向けた。

「情報だけならくれてやるさ。冠師のクロノバに会うのだ」

「その、クロノバとやらは何処にいるんだ？」

「この世の両端だ。此処が東ならお前は西へ。此処が西ならお前は東へ出向く必要がある」

「そうか。有難う」

「言っとくがな、お前じゃ無理だぞ」

「それじゃあ、ボランティアでやってくれないだろうか」

「お断りだ」

ウサギは、歩み始めた。私が進もうとした、右側の通路へ。

「最後に、質問が三つあるのだが」

「一つだけ受け付けよう」

ウサギはそういったものの、歩みを止めなかった。

一つの質問は、私の現在位置と、方角。

一つの質問は、何故ウサギの彼女が人間の姿をしているのかという
こと。

そして私は質問した。

「ウサギさんウサギさん。私の体は縮小していますか？」

ウサギは答えなかった。代わりに細く小さい腕を振る。

背中越しに、腕を振る。

段々と、ウサギが小さくなっていった。

私は、左側の通路へと向かった。

アドバンテージに私（前書き）

自分の行動を悪だと思ったことは何度もあります。

しかし、どれもこれも全て自分の向上に繋がるものでした。

恐悦至極に存じ上げます。

その質問、一節丸ごと集結、凝縮、冷凍させて、保存しつつ、あなたにお返し致したい。

アドバンテージに私

実に今更の一口話。あのウサギが私に託けたかったことは詮ずる所何だったのであろうか、と考えた。

張り倒された事に間違いはないが、存在奪取の意趣返しにしては若干ささやか過ぎやしないだろうか。一見、意味を持たない戯れにすら感じる。それどころかこの件で利益を得たのは、情報を拝承した私ではないか。

結論は簡単明瞭。ウサギは、役割を失した正にその時に一つの役割を半ば強制的に委任された。それが、紛れも無い。私に対する情報提供。

単にクロノバの存在だけではない。

警告の意、恫喝の意、そしてウサギの胸中。それらを含有した照明と証明の正銘な情報。

グローバルはインフォメーションの時代。

話は一変してしまうが、この役割の移転は常に同じ結果を招く。

即ち、私、若しくはウサギが来た所で、女王蜂にとっては同一の事象となる。仮に女王蜂がウサギと接見した所で、私が最前入手した情報もいつかは入っていただろう。

むしろその情報が、死の形で訪れていたのかもしれない。私はラッキーだ。

これを、ジェイルオルタナティブ、そしてバックノズルと言うものがいる。しかし、根源は私でも綿蕾でもない。

嗚呼、綿蕾に会いたい。あのウサギと綿蕾、どこか雰囲気酷似していた。しかし、実は一切、毛の先一本足りとも似てないかもしれない。綿蕾との再会を願って、頭が勝手にそう思い込んでしまうのである。

彼女はこれを聞いたら何とほざくだろう。

へへへ、僕と二本足ウサギじゃ、三百六十度違うってものだね！
ウサギも僕なんかと間違われちゃ、生命体の終期だぜ。

まあ、仕方ないか。生物は無秩序な分子からすらも法則性を見出すからね。床にこぼれたスポーツドリンクが何に見えるかってさ。

「全く。そんなに均一させないと気持ち悪いのかな、人間ってさ。

……か」

綿蕾の名一つで想像の基底すら支配される。

それでもやっぱり綿蕾に会いたかった。

しかし、今此処で祈願して綿蕾に会えないのだから、あの時私が、
マンホールに落ちようと落ちまいと、結局一緒なのである。

だから、私に出来ることは、イメージの範疇だけで綿蕾の声を聞くだけである。

さて、道には沢山の蛍光灯の様な浮遊物があるので夜道も安心。
かと思いきや、それらは今となっては唯の浮遊物となってしまう、
それどころか光源すらない為に浮遊物の有無すら確認できないのだ
った。

ぱっと、明かりが消えたのではない。僅かずつだが徐々に、明る
みを失っていく、挙句の果てに微光すら消えたのだ。

地下道が夜を告げたのだった。

夜を告げて、夜目の利かない私は停止をせざるを得なくなる。得
なくなったら私は、止むを得なく、就寝とした。

初めて道でねっころがった。

寝心地は悪いが、悪い体験では無い筈だ。

エピソードのウサギとも対面した。

粉を身にする如く。こうしてやっと、私の第一幕は幕を閉じた。

やっと、物語が進んだのだと思う。

それでも、

物語の静止には早過ぎる。

物語の制止には遅過ぎる。

ウサギと綿蕾。早かったと言うべきか、遅かったというべきか。

そうして、私は、地下水へ。今思えば当然の誘いであっただのである。

そこで、不可解なことが立て続け起こった。あたかも私の存続に終止符を打つ勢いだ。

しかし、それすら遅いのだ。私は、私の範疇のいずれか。何処から何処までは、人間の彼女で構成されているのかもしれないのだから。

私は、ベットで、朝目覚めた。

私は、地下の地下で目覚めた。

地下で、落ちるとは、不覚だった。

しかし、一つの発見があった。

地下の地下は森だった。

粉を身にする如く、強制成形プレス。

私は綿蕾の様な上手い戯言が吐けない。

カレーライスに如何様師（前書き）

歴史を参照する人物は、未来を軽視している
所詮、先読みなんて可能性の問題でしかないんだ

カレーライスに如何様師

気が付けば、立っていて。

気が付けば、波の上にいて。

気が付けば、そんなことを認識できるようになっていた。

そんな夢を見た。

私を支えるのは船。

人を運ぶのは船。

船の構造など、他人と然程変わらなくせに、外見は様々。

泥の船に乗る奴もいる。

豪華で巨大な船に乗る奴もいる。

否、そう見せているだけだ。

本質は皆、一緒なのだから。

では、何が他人を違った個体にするのか。

それは波なのかもしれない。

高波に寄ってゆく馬鹿もいれば、スコールに巻き込まれる不幸者。

ハリケーンに身を任せる奴がいれば、目隠しをして、波を見ようともしない愚人。

いずれにせよ、私はそんな夢を見たのだった。

そこには綿蓄もいたかもしれない。そうでないかもしれない。

季節が回る毎に、波がだんだん鮮明となってゆき、同刻にして、

だんだんとそれにあがらう事など出来ない事を知る。そして、時節、

歳月と共に、自我が舞っていた事を体得する。

百の舞でも、二百の舞でも、演じるべき時は演じなければならぬ。

私が、二度目を演じたのは不覚にも就寝中、無意識の内であった。寝込みを襲うとは正しくこの事である。しかし、襲われた相手が現に存在する訳ではなく、原因は円周、直径、高度、どの点を取って

も己にあった。故に遺憾に思えてならない。私が悔恨の情にかられるのも無理はなかった。私は、寝返りの一つや二つをうち続け、道路脇から転落してしまったのだ。

不本意ながら、私の寝相は根っからの悪性であった。裏切りが上手な私なだけに我ながら天晴れである。

落下中に目を開けた、その先一面、眼界一杯に木の群れがあった。意識が猛スピードで戻ってゆく。間もなく体が其処へ、底へと向かっていった。何度か、木に体をぶつけ、宙で体がくるくると回り、地面へ衝突。落下地点は一度目とは打って変わって、歴とした地面であり、後に激痛が走った。意識がそして又、失われていった。

モノの数秒の出来事だった。

翌朝、私はベットで目を覚ました。夢を見ていた錯覚に陥る。いや、夢は確かに見たのだが、どれが私の本当の夢だったのだろうか。

マンホールの一連からか？それとも、道路端に転落した所からか？そして、どっちも私の思い違いであった。私が寝ていたベットも、ベットが置かれたこの部屋も、部屋を持つこのログハウスも、見たのは今日が初めてだ。

部屋は、無論木造でスペースに余裕があり、とても落ち着けるものであった。が、しかし広すぎる。ベット以外に部屋には家具も調度も置かれていなかったのだ。部屋の端にベットが一つ。もしこれが、コンクリート造りであつたら、鉄格子の地下牢を連想させただろう。

私はベットから立ち上がり、部屋のドアノブに手を掛けた。掛けた所で、我が身が無傷である事に気付く。

ドアを開けたら、其処は大部屋であった。トーキョードーム如く大空間であつたが、恐らく此処がこの家のリビングなのだろう。部屋の壁にはドアが四方合わせて何十もあった。中心には円形の大テーブルが置かれている。

そして、そのテーブルの、何百もある椅子の一つに人が座っていた。

魚でも蜂でもウサギでもなく、確かな人だ。しかしながら、ウサギの様に人の形をしているだけかもしれない。

その人は、ドアから出てきた私を一瞥した。

「お早う。怪我人にお会いしたのは初めてである所存故に、あのベットの寝心地がどの様なものだったか私には想像もつかないけれど、よく眠れたかい？」

「はい、お陰様で。永眠してしまう程よく眠れましたよ。怪我のところを助けて頂いて、なんとお礼を」

私は挨拶に交えて拝謝で一礼する。

「いえ、困った時はお互い様です。こちらら死人が出るかと胸がはちきれんばかりの思いでしたよ」

無駄な考慮だ。他人に同情して救助するのは良いが、他人の為に自分の身を迫迫する必要は絶無なり。身を傷つけるほど他と干渉する事は無いのだ。

だが、そう思う私だからこそ。彼の言葉には感謝の至りであった。「立っているのもなんですから。尚更あなたが怪我人であることに変わりなく、今ここでぼっくりなされる可能性も否めない。どうぞ、お座りになってくださいな」

二言程、身に余るお言葉に甘えて私は彼の向かい側の椅子に腰を落ち着かせた。テーブルを経て向かい合う。距離は、五メートルほどであった。

彼は、一つ咳をして、私に訊ねた。

「朝ご飯は食べられますか？出来るならば、あなたの身の上話でもしながら」

「はい。朝飯前です」

良かった、と彼は目を細めた。

「カレーは好きですか？」

「はい」

「どんなカレーでも大丈夫ですか？」

「はい、ピークでもポークでも、グリーンでも何でも御座れます」
それならば、テーブルと小話でもして、今暫くお待ち下さいませと頭を下げ、彼は、大部屋の私から見て右端に並ぶ部屋の一つへ入っていった。彼が居なくなったりや否や、突如私が目前とするテーブルが私に話をかけてくる。

暇は好きだが、見慣れるところで過ごす暇は好きじゃない。だから好都合だった。私は、暇をすることなく、彼のカレーを待つことが出来る。

彼の一言通り、私が暫くお待ちしたところで彼が大鍋を、彼の等身大ほどある大鍋を両手を広げて持ち上げてやってきた。

テーブルに大鍋を置くと、何処からともなく、皿がフリスビーの様に飛んできた。それを彼は慣れた手つきでキャッチ。カレーを盛ると、皿が独りでに浮かび上がる。スプーンが横から介入し、皿と同化。それから私の目の前まで来て、再び動きを止める。

「さて、お話を聞かせてください」

猫舌の私が、熱々のカレーをすぐに頬張る訳にもいかず、一度手に持ったスプーンを再び皿の横に添えて置き、私は話を始めることにした。

綿蓄の話をしようとした。

とある研究室で行方不明となった学者が発見された話だ。それは、犯人が彫刻刀で人の皮を剥ぎ、人体模型とした。というものだった。しかしながら、話そうとして止めた。彼は、私の話を望んでいた。だから、私の話をしよう。

私は、地下道の話をした。つい最近の話。つい現在までの話だ。

「すると、その魚は独りでに死んでしまったのですね」

「いえ、私の台詞に彼は過敏に反応した。私が殺した様なものです」
「それは、違います。仮にあなたがその魚を苛めて、その魚が自殺しようとして、あなたが罪に問われる事はまず有り得ません。あなたが

直接手を掛けた訳でもないというのに。悪いのは自殺をした魚です。悪いのは勝手に永逝した魚なのです」

「何故、あなたはその蜂に殊更、偽り事をお話になったのですか？不幸になれない蜂の現状が不幸そのものだったというのに、何故それを言わなかったのです？」

「それだけじゃ蜂は成就されない。現状を気付かせる為には、相手の持論を潰して、其処に持論を当てる必要があります」

「しかし、それがあなたの持論でない限り、あなたが成就されませんね」

「その通りです。其処が又要点なんです。持論を押し通すのに、自分の持論を傷つけるのだけは避けたかった。ぶつけ合って消耗するのなら、虚言を使います」

「ウサギは、相違なくあなたを助けたかったのでしょうね。しかし、唯であなたを助力するのが癪だったのか、単に過労を嫌ったのか。中途半端です。聞いてるこっちが釈然としません。あなたもしかして、そのウサギを口説いたりしてませんか？」

「まさか、こちらは張り倒されて何も出来なかったのだ。その上、無駄に雄弁だったからね。口を挟む暇すらなかったよ」

「いいえ、恐らくあなたはそのウサギに何かおっしゃったのでしょう。さもなければ、一度目の出会いで何か仕出かしたか」

「一度目。大木の下か……。ふむ、その時にウサギを貶す様な発言はしたかもしれないな。それでウサギに嫌われたのだろう」

「そういうことはありませんよ。ウサギはあなたに首っ丈、とまではないかなでしょうが、好意は持っている筈です」

「何故そんな事が分かる」

「さあ、直感よりか、幾分マシな推測ですよ」

そんな、無味乾燥な話をしながら、カレーを冷めるのを待ち惚け

るのだった。他愛こそなかったが、暇潰しには上出来だった。暇もいいが、それを潰すものまた一興だと思った。

「どうぞ、ご賞味下さい」

「頂きます」

スプーンを掴んでカレーを口へ運ぶ。

その味は苦かった。

舌が拒絶反応を起こし、急遽、シナプスとシナプスの間に靄を掛ける。神経繊維に横線を入れる。それ位、苦かった。冷たいから一層だ。

「……苦い」

私は誠実に所感を述べた。

「しかし、あなたはカレーが好きとおっしゃいました」
彼はすまし顔をするのだった。

「焦げたカレーは好きじゃないよ」

良く臭いを嗅いでみる。焦げ臭い。

「此方とて、焦げたカレーは嫌いです。でもあなたは、焦げたカレーもお好みであると、此方はお察ししたので御座います」

「馬鹿な、そんな人間一人もおらん」

そこで、彼は多少驚きの顔を見せた。

「ほう、あなたは人間だったのですか。しかし、でも関係ありませんよ。どんなカレーも好きだとおっしゃった。此方が可笑しくとて、言語を取り違えているのはあなたなのです」

私と彼の定義の違いから成り立った勘違い。

彼の定義にはその、『どんなカレーの集合体』に焦げたカレーが含まれていて、私の定義にはそれがなかった。それだけだった。嘘を付いたのは私だ。

「食べるか食べないかはあなたの自由ですが。御代は頂戴します」

それから、私はログハウスを後にした。手には、彼から貰ったカレーを、空を飛ぶ皿とスプーン。

私は、どうやら詐欺に遭ったらしかった。

しかし、損した気分には慣れなかった。

話は、楽しかった。

損は、無かった。

だけど、このままだと彼が少し救われないかもしれない。だから、私は、そのカレーを思いっきり。地面に叩きつけてやった。ざまあみろ、と。

私の肩からは、例の紋章が消えていた。

全部、余すことなく何処までも好都合。この森の如く。

さて、夢で見た波なのだけれども、綿蕾だったらどんな波を渡るだろう。

答えは簡単。彼女はきっと、空飛ぶ船で、太平洋を切るに違いない。

すまし顔で。

まるでこれじゃあ、詐欺だ。

ムラサキに雲影（前書き）

喰う者は喰われる者に怨まれ、
その怨恨の大きさが又、喰う者の力量を表している

ムラサキに雲影

しかし、今となってもカレーを焦がす彼の意向がいまひとつ掴めない儘でいた。思わぬ仕様で金こそくすねられてしまったが、カレーを出されてしまった以上は、どの道食事代は出すのだ。わざわざ食材を無駄にしなくても良いではないか。

それとも、よっぽど私の痛痒顔を拝みたかったのだろうか。

でも、それじゃあ何故彼は私を救助してくれたのだろう。それじゃあ何故彼は私の話を聞いてくれたのだろう。

もし彼が私に類似した見の持ち主であったならば即答は出来る。それは不純物が混ざらぬ、真正の暇潰しである。私があの時、暇を潰した様に。

つまり実の所、彼の思惟こそ知ったこっちゃないけれど、行動に關してのみ言うなれば、努々その様な考えも又有りだと思ふのだ。喰えないカレーを作るのも一興だ。

これは、詐欺よりか悪戯に至近した仕打ちなのだろう。

私は、人どころか猫一匹通れないほど密集した木々の間を体をうねらせ縫う様に進んでいた。都心の満員電車より密度は高いだろう。こいつらは窒息を恐れないのだろうか。

遠くから眺める森林の姿は人を和ませるが、その渦中にいると唯の疲労にしかならない。いいや、私は別に山登りを嫌悪する人種ではないのだが、それにしたって限度というものがある。腰を下ろすことすらこれではままならぬ。

迷宮ならまだ良い。惑わせど道がある。騙せど道は消えない。

しかし、自然で落成された木造の壁が八方塞ぎときたら、手を挙げる他ないのだ。のみならず、現状で言ってしまうえば手を挙げることも不可能なのである。

温情主義の私でも、此処ばかりはチェーンソーの一つや二つは欲しい所だった。

これでは埒が明かない。私は無い知恵を振り絞る。

綿蕾ならば、否、矢張りそれは私のイメージでは無理だが。しかし、半歩でも近づく努力ならば私でも出来る。

意識を朦朧とするのではなく、存在を朦朧とさせる。

仕事を奪われたウサギの様に。

不正解で滅裂だが、道を誤ってはいない。

不適切で失調だが、道に迷ってはいない。

トレースする、そんな綿蕾と私を。

およ、誤って滑ってナポレオンでも蘇生させそうな勢いだね。

そんな君にアドバイスをあげよう。

百戦錬磨の虫ケラなんて、相手にしなくていいんだからね。

そして、抑制の抑制を抑制の限り抑制する。

そして、促進の促進を促進の限り促進する。

枝に足を掛ける。木の間隔は零距离に近いので、もう片方の足も容易と隣の本に掛ける事が出来る。

そのまま、手を横に開き、体を宙で支える。

足を一端木から離し、上の枝に再び掛ける。

それを繰り返し、いずれ塞がれ上がらなくなったら別の木に移る。まるで迷路を少しずつ進む様に。

段々と頂へと近づいてゆく。

隘路に戻る事へ成功した。

女王蜂が嘗て戻れなかった其処へ。

木の頂上へまで登りきった時には、私の息は途切れ途切れとなっていた。

見上げなくとも望める空色は紫。

ほぼ、雲による色であった。

紫が彩る雲の影は何処までも紫が付き抜かれていた。

酸性雨でも降りそうな勢いだ。

そうすれば、この木も少しは減るだろう。

だが、其処から地下へ戻ることは不可能であった。

空はあくまで空でしかなくて、上には上がないのだ。

紫はメビウスの輪の如く、上下永遠のものであった。

可笑しい。私は確かに、地下から空を通り、そして此処へと来たのだ。

それならば、何故空の上は空でしかないのだ。

此処から飛べば、地下へ行くのだろうか。

と、そこで不可解な事が起きた。

木が突如倒れたのだ。

ドミノの様に。

バタリバタリバタリバタリバタリバタバタバタバタ。

音が大きくなる。此方に近づいてきている。

理解不能であった。

不能である事に寸陰で処理できるほどの能力が私にある訳が無く、臨機応変に対応せよと脳が指令を送れど、体は何をすれば良いのか分からずに唯混乱するばかり。

そして、私の木が倒れた。

私は振り落とされた。

一度目は水。二度目は地。

ワンピースは確実である。

三度目は水だった。

こんな所に湖があるなんて、私の命運もまだまだ捨てたものではない。

骨は折らずにすんだし、服に付着した木屑は洗えるし、正しく一粒で二度美味しいと言った所だろうか。

無論、重要な度合いで図る成れば、前者が何よりもの第一条件であるのだが。

否、第一条件は易々とクリアした私であるが後者の第二条件はあ
る意味では果されなかった。

何時ぞやに出会った空飛ぶ魚の住む海は、澄んだ真水であったと
言うのに。私が落ちた湖はオレンジジュースであったのだ。

木屑より達が悪い。余計体中がベタベタではないか。

それから、警笛が鳴った。

電車に乗るときに聞く。あの笛の音である。

何を示唆するのは分からぬが、恐らく、湖に漬かる私に向かっ
て発せられたものであろう。

次から次へと。

悪戯にしては過ぎている。

若しかして、これは綿蕾に会える兆候なのではないだろうか。

努々その様な考えも又有りだと思ふのだが、どうだろう。

ソナチネに監視員（前書き）

何かの拍子に何かに浸る何かしらの物質であるべくの証明をしたい。
そして我輩の生きる理由是我輩を永らえる為なのではないことだけを最後にここに表明したい。

ソナチネに監視員

警笛は断片的に何度も音を発した。小動物が喧しく喚いている様で五月蠅く、迷惑この上ない。矢鱈無造作に鳴らし続けるものだから、私は終に咆哮する。

「何者だ、私が何をしたというのだ」

すると、私の胸が湖から引き離されていった。頭や肩に括られた紐を引っ張られる感覚だ。腰、太腿、アキレス、そしていよいよ足先が顕露する。小指の先から雫が数滴、漏出した。

オレンジが、飛沫を上げ、羽衣を立て、小波を広げる。

一身は、地から二十メートルのところで宙に吊るされていた。

高所から見下げる景色は絶品だと言われるが、自我の意図が其処に通っていないとなると話は別である。これでは、操り人形の気分あまり良いものではない。

話をしようと思っただけ。

私の声に応じたのは、何処からか。本当に何処からやってきたのだと訊き出したくなるほど突然、私に姿態を見せる大木であった。

発音は絶無。大木の念が勝手に私の髓へ響くのだ。

それにしても、この世の住人は何故こうも御喋りを愛好するのであろうか。実はそれ以外にやる事が無いのかもしれない。しかし、私にはやらなければ成らぬ事が仰山とある。例えばそれは森から脱する事であり、地下から脱する事であり、綿蕾に会う事である。

そんなに口を動かしたければ、皆、魚になれば良い。

お前達の茶番や座興に付き合う気など私にはないのだ。

「やるなら他所でやってくれ！」

大木の耳が何処にあるのか分からないので、大声で。彼の鼓膜が震えるように、大声で私は叫ぶ。

叫んだ。頭髮が逆立ち天を衝くまで。

しかし、そんな風に声を張り上げる私を気に留める事無く、否、

それが果たして彼に聞こえていたかどうか。大木は私へ伝達を始めた。

此処からは、私の一心は何処行く風。一方的な受信のみだ。まるで一方通行の意志相通である。

どうやら、彼は私を当初から追尾していたらしい。そして彼は言うのだ。剃刀男の殺害。女王蜂への妄言の数々。仕事の窃盗。食器の破損。この森への不法侵入。殺害罪、隠匿罪、詐欺罪、窃盗罪、破損罪、営利誘拐罪、侵入罪だった。罪の数々。償わなければならぬ。それがルールらしい。ルールを破っている輩にルールを掛けるとはアンフェアなのでは、と思う。云々、それでも、私は確かに罪を犯したらしいそうだ。

この世の最高刑は首を切断し、放置。死人は無論、出ない。

だれも傷つかない絞首刑。

だれにも傷をつけない唯の処刑。

それは、この世の住人達に唯一いえる事である訳で、私が首をはいどうぞと差し出せば、私は一間にして絶命するであろう。

しかし、私は言い包められてしまっていた。

どうせ、逃亡方法も無い。

それでは、どうしろというのだ。

何をした。何をすれば良い。

過去の過ちは未来の謝罪。

それだけにどうしようもないくらいにどうでも良いことだということ。

だからどうしたというのだ。

過ちに気付かぬ者に謝罪は出来ぬ。

成仏は真っ平御免である。

何もかも、私はやらない。

「見てな、今に星が落ちてくるぞ」

私は危惧の念を抱かない。

身が削がれようとも、もがれようとも。

一命の配慮などしたことがない。

時間が何故に一定であるのか。

それは僕が克服する為だよ。

歪むは僕じゃない。何も曲げず何にも曲げられず。

そうすれば、それは易々と成し遂げられるだろうね。

僕は、だからこそ疑念を持つ。

何故、一定を操作できないのだろう。

数字は人を裏切らない。人がそう定義したから。

だから、数学は人を裏切る。数値が正直で、人が僻んでいるからだ。

綿蓄は場違いだからこそ、身の程を弁えていた。

この一間でしか蠢けないモノがあるのだぞ、と。

私はもしかしたら、遠隔操作をされていたのかもしれない。

「きっとその星は、生命の一存じゃ触れることすらできないだろう。それほど、想像が追いつかないほど高貴なのだ」

しかし、星は常に私の隣で照らしていた。惜しげもなく私を世へ晒した。

「そんな目一杯の鼯目目でこの僕を見てくれる人がいるなんて、こ

の世もまだまだ捨てたものじゃないね。捨てるつもりもないけどさ」

綿蕾が、大木の脇から現れた。

普通の登場、変哲のない参上。これぞ何者にもあらず。

そうやって僕と綿蕾は再開を果たした。

「別状はなさそうだね。それより酷いよ、さっきから必死で笛吹き
続けてたんだからね。お陰で頬が緩みそうだよ」

「悪いな、こっちに着てから、どうも感覚神経が尋常じゃないんだ。
そっちは、相変わらずだな」

「そうでもないよ、最近しわが増えた」

「へえ、あんまり老けたようには見えないけどな」

「違うよ。脳のしわが増えたの」

どうやら輝きは増す一方で留まる事を知らないらしい。

何よりの平和だな、とそう思う。

安定の如く停止する。足踏みをする。それが私の理想だった。

暇の暇の暇を満喫するのが、私の至福だった。

安心は心配の後遺症とも言い得る。

しかし、綿蕾はその例外だ。

存在の全てが私にとっての無比である。

彼女は、転々と進出してこそ、安楽を得るのだ。

「時に綿蕾しずるよ。君はこんな辺鄙な所へ何の用かい」

「奪われそうな僕の大切な命を、奪い返すのさ」

「そんな事が出来るのかい」

「出来るさ、僕、悪いけど精算能力と雅量だけは一著前なんだよ」

上等だ。私は吐き捨て身を全て綿蕾に委ねた。

命と言わず、何もかも持っていつてくれ泥棒よ。

もう、遅いだろうけれども。

タイボクに綿蓄しずる（前書き）

割と相通サブカルチャー
いつかは一軍サドデス
それよか虚ろいアクチュアル
あながち言い得たコンバット
一応次元はキュービック

タイボクに綿蕾しずる

周りが全て厭わしい。私と綿蕾さえいれば、世界など最早用済みである。

綿蕾は私の目前まで地を馳せやって来て、両手を挙げて見せる。私に降りて来いといっているのだ。

「生憎、体が言う事を聞かない。降りるに降りられなくて困っている」

私は言った。体が動くなら、手のひらを上にして、顔の横に広げるジェスチャでもしていただろう。

「そんなことはない。私の身体さえ制御できぬ人間など世にはいない」

綿蕾が言うと、同時に、ふっ、と体が地へ落ちていった。音を上げ、波紋を広げ、オレンジの湖の中へ。

「走る者は歩く事を知る。進む者は戻る事を知る。飛ぶ者は落ちる事を知る。これが自然原則ってものさ」

立ち向かうものは逃亡を知り、本気を出す者は妥協を知る。

あたかも、心配を知る者が安心をする如く。

それは逃げ口上というものだ。と、大木が唸った。

彼の意思は骨に直接響く。

そうだ。確かに、私達の言葉は口先から音を発している。いつも被害者ぶり、遁辞を吐き、時に裏切り、時に裏切る身振りを見せて、いかにも釈明ぶった冗語を平気で並べて、どこからともなく弁解の余地ばかりを引きずり下ろし、屁理屈を持論とする。口実を言い草とする。

戯言遣いだ。それ以外の何にも属せない。それだけに、何色にも染まる。

私は、オレンジジュースの湖を端まで泳ぎ、差し伸べる綿蕾の手をしっかりと掴み、陸へと這い上がった。

其の儘。其の儘で私と綿蕾は二人分、大きく振り返り、大木を見上げる。

「でも、やっぱり思慕の念は拭えないね」

「そうだな」

それは懐かしい、私の暇を作ってくれる存在だった。

寝転がる二人と走る一匹。

全てを天から見下ろした唯一の存在だった。

これを切り倒す訳にはいかないだろう。

「武力行使が何より被害を一番抑える。しかし、餓鬼みたいな事にはもうここ二日でうんざりなんだよ」

私は言う。最早、私の全てを知る綿蕾に言葉は不必要であったがそれでも、喋らずにはいられない。

「あえて、最小の犠牲と最大の利益なんて考えない。君らしいよ」
綿蕾はそこで、私に薄っすらと微笑む。「チェンソー、持ってくる必要なかったね」

「持ってきたのか？」

抜かりはないさ、と綿蕾。流石である。何事においてチェンソーを持ち歩く人間がどうか。

「大木、話がある」口火を切ったのは何より御喋りを愛好する私だった。「私は罪など犯していない」

大木は、しかし何も言わない。

「聞こえないのか？ 私は罪など犯していないぞ」
綿蕾が私の手を引っ張った。

「大木はもう大木に戻ったよ。さあ、森から出よう」

戻っただって？ 何も今戻る必要などないだろう。

「だから、植物は僕らみたいに歩けないし、目が無いから視界自体が存在しない」

綿蕾は大木へ、手を触れる。

「虚栄がばれたって思ったんじゃないかな」

「虚栄だって？」

「だからさ、あの木は言いたかったんだよ。嘘を、僕らの様にさ」

目には目を。戯言には戯言を。

戯言には真実を。

そうか。大木が真の大木に成ってしまえば、もう私は何も言えない。

言うことも無い。

「帰ろう、しずる」

「そうだね。積もる話もあるし、お茶会でもしたいな」

「いや……、それより帰れるのか？　っていうか、此処は何処なんだ？」

「え？　知らなかったの？」

綿蕾は足を止め驚愕した。てっきり私の意中など全部見透かされていたものかと思っていたのだが、どうやらそうでもないらしい。救われる話である。綿蕾はこの世について、詳述してくれた。

「此処は、パーソナルワールドだよ。ホストは恐らくクロノバだと思う。コンピュータの様なリンクがあるから、惑星から惑星まで一瞬で飛んでしまうんだ。まあ、パソコンに閉じ込められたと考えるのが一番しっくりくるかもね」

「つまり、この世全てが詐欺か手品か幻影の様なものなんだな。満更、現実の隔絶というのも否定できない。」

「そうだね。兎に角、この星やあの地下道から脱出する手法は、元来た道を辿るのではなくて、接続口を見つける事なんだよ」

綿蕾は、再び歩き出した。行き先も足取りもしっかりしている様子だ。

「元々、此処自体がブラウザのアーカイヴみたいなものでさ、もう発見するまですごい苦労したんだかんね」

「圧縮されてたのか？」

「うん、木とか、途中で倒れたでしょ」

嗚呼、あれ、ファイルを凝縮されてたのか。

「カーネルはもうあわせてあるから、後はエンターキーを押すだけだよ」

何もかも、本当に抜け目が無い。綿蕾は天然の完璧主義者なのである。

「話題が変わるけど、何でしずる、此処がわかったの？」

うん？、と綿蕾は首を傾げる。

「それはね、僕の長年の夢が、世のPCを余すことなく手中に収める事だからさ」

成る程、ハッキングの過程にクロノバがいて、クロノバの渦中に私がいると気付いて態々やってきてくれたのか。有難い。本当に感謝である。

「そういえば、ウサギに会わなかったか？しずるより小柄で、喧しいじゃじゃ馬だ」

「嗚呼、会ったよ。なんていうか、野放図を割れた鏡に映したような子だったね」

うん。確かにその通りだ。馬の様に速く、鹿の様に軽やか。正しく彼女はそんな子であった。

「あの子、酷いんだよ。僕が声掛けてもあつさり無視するんだもん」

サボテンと浮浪者（前書き）

未熟の癖に未来を破り。

未完の癖に前代未聞に対峙する。

無力の癖に無限を破り。

無知の癖に無茶苦茶に対峙する。

不安の癖に不朽を破り。

不定の癖に不可思議に対峙する。

幼かったから、自覚は無かった。

言われて、初めて気が付いた。

最初は、嘘だと思っていた。

でも、それは大間違だった。

サボテンと浮浪者

それから、綿蕾は、無数ある木の中の一本。其処へ私を連れて行った。その木は、他の木となんら変わらない。勿論、喋ったりもしない。

綿蕾は手をシャベルにして、その木の下のを掘った。

「チェンソーはあるのに、シャベルは無いんだな」

私は土堀に勤しむ綿蕾の横にしゃがみ、彼女を手伝った。まるで幼少時代を連想させる。これでは土遊びだ。

「うん。僕の手はこの様にシャベルの代わりになる。だから土を掘る事は不可能ではない。でもね、いくら僕でも大木ばかりは、道具がないと切断できない」

必要と不必要の分別。其れは自我の可能と不可能を見極める必要がある。

必要が必要。不必要は不必要。その判断がどれほど困難なものか私は知っている。

さて、綿蕾がこうおっしゃっている。つまりは、此処から脱する必要最低限の道具はもう既に、一通り揃っているという事と思っていのだろうか。それが、どんなに時間を浪費する結果となっても、一先ず、私は無事に帰れるという訳である。ありがたやありがたや。

「あつたよ」

綿蕾は土の中から覗けた木の根を指差した。

「木の根が何かに化けるのかい？」

私は綿蕾に訊ねる。綿蕾は答えず、根を引き千切った。それから突如、ポケットから剃刀を取り出し手に持つ根にあてて強く引いた。根の表面が削れ、中から横縞の植物繊維が確認できる。

「どうぞ」

「ぐむ?!」

綿蕾は繊維を私の口に摘んだ指ごと押し込む。

繊維の食味は、なんともいえないものであった。

私は地下道の帰還に無事成功した。

「つまりね、あの根の繊維を食す事が、地下道へのリンクだった訳」
綿蕾は私にそう説明した。

「今度は落ちなかったな」

翌々省みれば、私は、この世にやってきてから計三度ほど落ちていた。その話を綿蕾にすると、君は日頃そんなに欲求不満なのかな、と一言。取り入って気にした風も無く、矢張りどこかへ歩き出すのであった。

物事が上手に進みすぎている。

綿蕾の前では、物語の筋道すら譲歩されるのだろうか。

拍子抜けである。彼女の背を前に、私は唯、暇をするだけ。

昔もそうだった。だから今もそうである。絶対の綿蕾に変動の二文字は皆無、それを私の身が証明していた。

「此処はね、コンピュータの中であり、そうではない。まるで、中にいる自分を外から機械で操作している様だ」綿蕾は独り言の様、呟いた。「だから、簡単だ。何だって出来る。ターミネータを弄っても良し、ターミナルを罫るも良し、嗚呼、不甲斐なさ過ぎる！」

「何をそんなにカリカリしてるんだ。別に、そんな複雑なことしなくたって、ネットワークを切断したり、バッテリーを落とささえすれば、早く済む事なんじゃないか」

綿蕾は、そこで私の方へくると振り返り、指で私の額を指す。

「それじゃあ、僕らが消えてしまう。若しかすると、その電源は二度と入らないかもしれないよ。ウィルスを此処に入れる事も考えたけど、やっぱり、僕と君が此処にいる以上、それも出来ない」綿蕾は、片手を腰に、片手は人差し指を上下させ、私の前を右、左と往復する。まるで講義中の講師である。本人も意識してやっているのだろう。「そうになると、やっぱり、最低限に、不具合を起こして、クロノバをこちらへ向かわせるしかないかな、こっちから会いに行

くのは面倒だしね」

自ら向かうのではなく仕向ける。

私が綿蕾を釣ったあの日。

私は、思った。

実は、釣られたのは私の方ではないかと。

海老で鯛を釣る事は容易である。

対して、鯛で海老を釣る事は不可能に等しい。

しかし、綿蕾ならどうだろうか。

彼女が鯛で、自分が海老。

綿蕾なら、不可能じゃ、無い。

鯛の身で私を釣る事も。

ここで、嫌な可能性が浮上する。

クロノバは、釣られようとしている。

綿蕾が、海老で、クロノバが鯛だとしたら。

食われるのはどっちだ？

「まあ、つまるところはね、ここにいる僕そのものがウィルスにな
ってしまおうって話さ」

綿蕾は、言う。

「話は理解できる。しかし、一体何をするつもりなんだ？」

「壊れても支障が無いプログラムに一寸悪戯をする、それだけだ。

ラクチンラクチン、御茶の子さいさいだね」

行き着いた先は砂漠であった。一面の砂、白い岩、乾いた風。

「しかし、砂漠というところは実際に訪ねてみれば、然程暑くはな

いのだな」

私は、率直な感想を述べた。

「それは違うよ。此処は実際ではなく、バーチャルなんだからね」

「この砂漠のプログラムを破壊するのか？」

「其れもいいけど、少し様子を見てからかな。僕はそこ等辺ぶらぶらしてくるから、君は休んで良いよ」

「いいや、私も行く」

一人の間に何かに襲われたらたまったものではない。私は、歩き出した綿蕾の後を走って追いかけた。

何と無く、懐旧の念が押し寄せてくる。

これについていけば、損は無い。否、損傷は膨大なものだが、必ず其れを上回る役得がある。私は、当時、そう思っていた。事実、その通りだった。こいつの周りではマージンが滅茶苦茶なのだ。だからこそ、彼女は其れを貪欲に受け入れる事は無かった。

利己主義で常人の私は、其れが信じられなかった。だからこそ破産した。

タイヤのパンクと症状は似ていた。私には、あまりにも供給量が大きすぎたのである。

許容量がそもそも違う。人間とは、元々、一つ覚えれば一つ忘れる生物なのだ。

無知は、危険。

覚知は、苦痛。

予備の知識は、重荷となり、記憶の健忘は、損失となる。

要するに、バランスとバランスの綱渡り。

「貪欲を言わせてもらえればね」綿蕾は、両手を挙げ大きく背伸びをする。「この件が片付いたら、誰かと旅行でも行きたいな」

「良いよ、何処か行くか」

私は何の装いも無く、言った。

「それじゃあ、世界一周にでも付き合って貰おうかな」

「地球一周なら良いけど、宇宙一周は無理だぞ」

ふと、綿蕾はそこで足を止めた。私は彼女の背中にぶつかりそうになる。

「人が倒れてる」

それを聞き、私は、綿蕾の隣に並ぶ。すると、サボテンを日陰にしたところに確かに人が倒れていた。

「あーあ、酷いな、干からびそうだね」

「そうだな。あんなの、犬しか喰わねえよ」

綿蕾は、両手でグーを作って、手首を内側に曲げる。

「ワンワン」

「……、嘘だろ？」

綿蕾は、小走りで、サボテンへ向かっていった。

ウサギに庭園（前書き）

マイペースを捨てればオールマイティになれる。

故に、何事にも深く関与しないことだ。

そして、多弁を寡黙へ。

そして、勃発を沈着へ。

そして、騒乱を静寂へ。

マイクロの点も無い真白へ、引っ張れ

ウサギに庭園

「ちよいと、其処のあんさん」

綿蕾は腰を屈め、倒れた何者かの肩を叩いた。

そいつは、首から上が馬であった。立派なまでの遺伝子組み換えだ。しかし、幾ら綿蕾が声を掛けても、矢鱈滅多らフガフガと鼻を鳴らし肩を上下させるだけだった。口が馬だけに、語らいの能力が無いのだろうか。だとすれば、馬の様に速く走るのも不可能なのか。体が人様なだけに、馬刺しにも成り得ない。

遺伝子組み換えも、組み合わせによっては、相当な無益である。

「惜しいね、これ、上下逆さまだったら見事なケンタウロスだったのに」綿蕾は、大層残念そうに肩を落とした。「でも大体こんなものかな、キマイラにしても、使われる体のパーツによっては唯の下等生物だよね」

確かに、スレイプニルにしたって足が九本じゃ、ギリシャ神話には呼ばれなかっただろう。勿論、足が九本のスレイプニルに落ち度があるわけではない。唯、ギリシャ神話が極上に都合が良いだけなのである。

「こいつは、犬も喰わないな」

私は言う。綿蕾ではなく、未確認生物に。

「うん、犬が当たる棒にも成れないね」

「こいつをどうするんだ？」

「ちゃんと食べるよ、食わず嫌いは最良ではない」

綿蕾は、そう言った。好き嫌いは良くない。そもそも人の思索や、恣意的な趣向の一存のみで、そんな事を決め付けてはいけないのである。自分の常態化と、後景とを総計して、それぞれの状況に見合った最上を、其れを人は好きにならなければならない。それが上手に生きるコツなのだと、彼女はそう言った。

と、綿蕾が、手を伸ばし、其れの腕を掴んで持ち上げようとした。

その時であった。

「おい、お前は幾つ俺様の仕事を奪えば気がすむんだ！」

小柄な矮躯から発される耳障りな声。何時ぞやのウサギがサボテンを飛び越えて現れた。

私は、ウサギの突然の登場に驚愕する。

「来たね、犬を放つ為のウサギが」

綿蕾の囁きは、自然と私の耳へと入る。

「なんと言おうべきかな。一先ず、久しぶりだね」

ウサギは、私の声にその大きな聞き耳を立てる事も無く、マシンガンの様に喋りだした。

「次から次へと、俺様の前に立ち塞がりやがって、今も、俺様の役割を強奪しようとしただろ、この泥棒め、恥を知れ！！」

「おやおや、噂に聞く喧しさだ、よしよし」

綿蕾はウサギの頭を撫でる。すると彼女は、くると大きな目で三角形を作り、綿蕾を下から睨む。顔は相変わらず真っ赤である。

「ところでウサギさん。あんたは今、何の仕事をしているんだ？」

私は、ウサギに訊ねた。

「死体の始末屋だよ」

ウサギは答えた。

ふむ。この世の生態は知ったこっちゃ無いが、どういう事か此処の生命体は死なない構造をしている。そんな世界にとって、この弱った出来損ないの馬は、死体と同等に扱われるのかもしれない。

「そんな下賤な職に手を出すほど、君は仕事に飢えてるのかい？何なら僕が仕事をやっても良いんだよ」

綿蕾は、矢庭にウサギの腕を掴んだ。ウサギはさも不快そうに綿蕾の手をじっと見て言った。

「報酬は、どれくらいだ」

「チェンソーだ」

何故、此処で其れが出すのか。私は啞然とする。

ウサギにチェンソー？猫に小判の間違いではないか。

必要に必要。不必要は不必要。この見極めの困難さは私が一番良く知っていた。

ウサギは頷いた。

「分かった、いいだろう」

ウサギは、チェンソーの用途を知って知っているのだろうか。それとも、唯、綿蓄にちよろまかされているだけか。

ウサギがチェンソーを貰い受ける事由が、私には理解できなかった。

「チェンソーは、地下の森にある。ルートは大丈夫？」

「余裕だ、それじゃあ、お前達は先に進んでくれ。此处からなら西のクロノバだ」

「必要は無い。僕達は豪邸の庭園へ行く。そこで落ち合おう」

「勝算はあるのか」

「十割。ないし、一割と言ったところか」

「承知した。可能な限り早急に済まそう」

「まあ、精々、一割に期待してるよ」

「約束は必ず履行する」

「それじゃあ、頼んだよ」

口を利けない私を他所に、彼女達は話をつけ、腕と腕を互いにぶつけた。

瞬間、ウサギの姿は消し飛んだ。テレポートを見ている様であった。

「行こうか」

綿蓄は、僕の手を握る。そして歩き出した。並んで、進む。

其処には、馬の顔を持った人だけが残った。

「あれは、正真正銘のミノタウロスだったね」

綿蕾は言い、私の顔をじっと見た。

この顔を私は知っている。

彼女は私のつつこみを待っているのだ。

生憎、私には意味が分からなかった。

逸脱も大概にしてほしいものだ。

私は後ろを振り返り、ミノタウロスを見た。

同情しているのは私か、それとも彼か。

ヒステリシスに私（前書き）

なにかもを捨てたときに思う。

私にはなにかもが必要であると。

ヒステリシスに私

「君が今、遂行していることが後に私へ施す形と成ろうとも、矢張りそれは所詮一方的な後押しでしかない」

「祈願、主張、謀略、逃亡を他者への押し付けと形容するならば、確かにそれは後押しなのだろうけれども」

彼は私の肩を叩く。痛くは無い。神経が彼を拒絶しているのが分かる。

「それは人類の平和が地球の平和と酷く相違しているのと状況が似ている。どちらの平和に付くかは、尊重の自由。だから、強要ではない」

若しくは、教養と言うのか？少なくとも強迫ではある。私が全ての事象を、中心の自分から発しているのだと、そう取り違えていたとしても。彼の行動そのものが攻撃的であった事は確実である。

私をリモート式のコントローラーで操作しているようにしている。

錯誤、錯誤錯誤錯誤。鏡に鏡を宛がう様に、真実を真実で写し、それ自体が振れ拉げて、歪曲となり笑う。

「私を動かしても進展はないぞ。それどころか相成るものすらその姿を消すだろうな」

「原型を留めない、か。寧ろ俺は其れを望むのだけれどもね。否、臨んでいるのは、何者でもない。貴方自身だ」

「話が見えない。私の要領の悪さは、名が地を馳せる程だぜ」

「嫌でも体にそれが刻まれる時は来る。貴方が四次元に住まう限りは」

「いいや、それでも私には想像が付かないね」

イメージ力の欠如。先読みの先読みは苦手だ。

行動を見て人を知るのは、あまり愉快ではない。

又、話して、触れて知るのは、更に厭わしい。

「難波土産。デストロイヤー。破壊を一次的欲求下に持ち、渴動因、

空腹動因、睡眠欲と共に、破壊動因が伴う。勿論、其処に深い意識は無く、爆碎時に快楽を得る事はない。物質を壊すにあたり、其れのウィークポイントを瞬時に見抜き、精確に突く。欲求の高低には多少の漣が見受けられるが、最低でも一日一回。物質が無い部屋に閉じ込めれば、その部屋ごと撃破する。手足を縛った場合は、其れすらもをあらゆる手段、手法で引き千切ってみせる。その破壊は、就床の最中ですら起こりうる。その対象はモノが凡そ九十パーセント、残りは、生物。若しくは人。しかし、貴方が一度拝顔した人物を殺した実績は絶無である」

視覚が完全にシャットアウトされる。視覚も大部分が白く掠れていた。

しかし、閉ざしても、言葉は流れる。

自我の神経系ばかりは幾ら私でも遮断できぬ。

「しかし、驚愕なのは、貴方の知り合いの数割が失命しているという事実。勿論、貴方が直接手を掛けた形跡は全く見当たらない。その死因は、事故死、病死、焼死、水死などと多種多様。その能力が人間の関係を根本的に断ち切るという可能性がある。他所、詳細を口述するのならば、その破壊が貴方の体に影響される事は無い。つまり、リスクを負わない破壊をする。しかしながら、貴方の体脂肪率、筋肉質、骨密度、体重や身長などは成人男性の水準を大きく上回っている訳でもない」

彼は、呪文の如く流暢に話す。そつがない。

初めて知らされた自分のデータは、決して良い情報とは言い難い。

「随分、博識だな。尚、私に近づこうと言うのか」

「後にも先にも無い未知の遭遇だからな」

私は、人間ではなく、宇宙人なのか。話を聞けば、聞くほど自身自身がそう思えてくるから不思議なものだ。

勿論、それすら錯覚だ。

歪んだ鏡を見せられているだけ。

物事を誇張しているに過ぎない。

「私には、関係の無いことだ」

彼はそんな私の言葉に首肯する。

「その通り。君の破壊に意思はない。だから見識もなければ、思惑もない。しかし、尊慮もないし、所懐もない。まるで悪魔だ」

彼の顔は、もう私の記憶にはなかった。

もともと、頻繁に会った仲でもない。

彼は、もういない。

どこかでひっそりと生きているかもしれないが、それはないだろうと思う。多分、私が既に彼を殺したに違いない。

それすら記憶に無い。

だから、真実はやはり鏡越し。

左右反転の、予定調和。

死んでも喰えない奴だった。

焼いても食えない奴だった。

骨と、鏡が残った、かもしれない。

もうすぐ終わる気がした。

幻想とか、魔法とかの効力そのものではなくて、それでも何かが終了する気がするのだ。

私が終わらせるのかもしれない。

綿蕾や、クロノバが終わらせるのかもしれない。

しかし、問題なのは、それが歓迎すべきことなのか、そうでないか。

其れを、選択するのは私達で、その答えすら知らないから、選出しなければならぬのである。

地下道はもう二度と通ることはなかった。

砂漠は通った。その後、車に乗った。コインを拾った。そいつが計画された様に喋りだし、綿蕾はそのコインをオアシスの池へ投げ捨てた。すると池から女神が出てきて、私達は矢張りそれを無視する。それに激怒した女神は空から斧を落とし、其れを避けるために、

又池に落ちる。再びびしょ濡れになって、綿蕾が愚痴を零し、私は彼女を宥め、気がついたら、車のガソリンが不足してしまい、綿蕾は、車のタイヤを外して自転車を作った。自転車は、三百四十度見回す限りの自転車だったが、前後十度ずつから見たその格好は、自転車とは言い難いものだった。しかし、それは自転車としての役割をきちんと自覚し、人間を乗せて走ってみせた。自転車がすごいのではない。綿蕾が器用でなんでもできる。それが素晴らしいのだ。「この世の全てはね、コンピュータプログラムで説明がつく。だから、その再現も容易なんだよ」

私達は終に到着した。其処は真つ白な城であった。

「だから、僕は極稀にだけど、思うんだよね。僕達の世界こそがコンピュータの中身なんじゃないかってさ」

城は、自身の巨大さに誇りを持つよう、胸を張ってしゃんと建っていた。しかし、この世に猫背の建築物など無い。

だから、幾らそれが偉そうであっても、私は特に気には留めなかった。

「勿論、そんなことないんだけどね。プログラムの起源となる数字を初めて身につけたのは、人間だ」

庭園。

それは、蔦と葉を何重にも重ねた緑の壁が、迷路の様に道を作っている。

城は命を持たない。

しかし、この道は命を持つ。

「さて、準備万全だ。ウサギさんは来てるかな」

直後。ウサギは、相変わらず荒唐無稽が出鱈目を吐いた様な文句を一言二言三言程口にして現れた。

役者のいない物語は、加速をする事がない。

しかし、それでも静止には早く。

しかし、それでも制止には遅く。

今回も、綿蕾をつき合わせてしまった。

それは、宇宙一周分ぐらい。それが相場だ。

旧態依然。結果も、過程も、発端すらも姿は変わらない。

私ではなく、彼女が中心。

破壊ではなく、裏工作ばかり。

和解には程遠い。

音の波長が唯回避されてゆく。

イメージしただけで、浮上するフレーズ。

それが、あたかも虚しい核心で。

それを以っても、一日という単位は、一生になってはいけない。

そして私は彼を思い出したのだった。

プログラムに大団円（前書き）

片っ端から見たもの聞いたものを全てを体内に詰め込める習性があるのならば。

片っ端から、要らぬもの、ましてや要るものですら徐々に捨てていくのだろう。

プログラムに大団円

綿蕾曰く。ハッカー、又ウィルスはネットワークを經由し、脆弱、即ち、アプリケーションやプログラムの作動に伴う脆さを狙って攻撃を仕掛け、その範囲を徐々に拡大させてゆくものらしい。

そもそも、この巨大庭園が、アプリケーションなのか、プログラムなのか、又や此処が脆さそのものなのか、この風情を見ただけではなかなか飲み込めなかった。

しかし、元々この世界そのものが不可解を何乗にも重ねた様なものであったし、綿蕾は綿蕾で不得要領が更に図抜けているので、解説を聞いたところで私には到底理解出来まい。私は、彼女に何も訊ねる事はしないで、唯、それじゃあ頑張つてと力付けの言葉を掛ける。力添えには少々不足しているようが。

「それじゃあ、やるとするか」

これから一杯ひっかける様な調子で、綿蕾は庭園の奥へと進んでいった。

突き進んで、突き進んで、突き進んで、直に草木で作られた壁に差し当たり、そして何をするものかと思いきや。

「ふんにゃ！」

あろう事か、そいつをドロップキック。しかし、壁はびくともしなかった。壁に跳ねられ宙に浮いた足は、その儘で接地し、彼女は腰を強く打つ。

「この壁を破りたいなら、そう私に言えば良いだろう」

私は倒れながら腰をさする綿蕾に少し強い語調で言う。だが、綿蕾は私へ右手を突き出して掌を見せた。

「待ってよ。これは僕の仕事」

ほごくな。私の唯一とも言える取柄を此処で発揮しないで何時に発揮せよというのだろうか。平素から滅法役立たずである私が此処

で一役買わずに何時購えば良いのだろうか。力が及ばなくとも、だからこそ普段何時も私を助け続けてくれた人を、助けたいと思うのが人間の心情というものなんじゃないのか。それとも、私はそこまで役立たずというのだろうか。

「まさか。しずるが其処まで私を過小評価していたのか」

声が微かに上擦っているのが自分でも感じ取れる。

「違う違う。僕はね。君にはもう、壊すのはいい加減辞めて欲しいんだよ」綿蕾は、首を左右と捻る。

「僕を選んだならね、其れくらい。破壊欲求ぐらいどうかしてもraithたいんだよね。それが人間の道理ってものなんだよ。それとも若しかして、若しかすると、物理的な殺傷能力が唯一の取柄とか、そんな蒙昧な事を考えてんじゃないだろうね？」

赤子じゃあるまいし、欲情や本能の儘に活動するな。綿蕾は私にそういうのだった。

怒りが、腹の底から沸々とせせり上がってくる。対象は無論、私自身であった。同時に、どうしようもない羞恥心を覚える。そして自分が情けなくて仕方が無い。

これじゃあ、繰り返している。過去のテープを再び流している。同じだ。何も変わらない。変わったことといえば、隣に彼女がいてくれることぐらいであり、又それが、感情を一層強くさせる。

「悪かった」

私は、手を差し伸べ綿蕾を立たせる。いっそ、この手で自分の頬を一発打ちたかった。しかし、それすら破壊衝動なのである。

かつて、武力の有無や、最小の犠牲、最大の利益などを全て捨てきってみせた当時の私を綿蕾は私らしいと称してくれて。

そんなことすら忘れてしまうとは。いやはや、私の器はお猪口の様には矮小である。

「ところで、チェンソーでぶった切った方が幾らなんでも早くない

のか？」

と、脇に座って、私達の茶番を目を細めて見ていたウサギが終に口を出した。綿蕾は、うん、その通りだね。とウサギに同意し、結局、チェンソーを使って、その壁は壊された。

私の羞恥心はなんだったのだろう。

「クロノバは、あの城の中にいる」綿蕾は、私へ説明をする。「正確には、今はいないんだけど、もうすぐ城へ来る。勿論、城の中に入る気は更々無い。この庭園まで引っ張り出してやる」

「まあ。俺様が何とか誘き寄せてやる、大船に乗ったつもりでいろ」ウサギは胸を張った。

「但し、僕の方の船は、実は泥舟なのかもしれない。まあ、泥舟には泥舟の良さがあるんだけどさ。大量生産にはもってこいだよね。変幻自在だしさ。何より、沈んだときのショックが小さくて済む」

「らしくないな、しずる。お前がそんなに弱気なんて」

「単にポディシブなだけさ」

状況は世紀の大天才を前向きにさせるほど絶望的なのか。否、そうかもしれないし、そうでないかもしれない。それはクロノバ次第なのだろう。

「それじゃ、俺様は先に行くからな。城の前で待っていてくれ」ウサギは電光石火で一瞬にして消え去る。

城へ向かう途中、綿蕾は私へ話し出した。

「しかし、正直に言ってしまうね、君が僕を選んだ理由が今でも良く分からないんだよね」

「唐突だな。面食らうね」

「うあ、そこで誑かすなよ。嫌だなそういうの」

「あまり深い意味はない。深く考えられる頭も持ち合わせちゃいないからな。だからお前には分からないんだよ。物事を考えられないやつの行動が」

しかし、それでも納得しかねる様子で、綿蕾は首を傾げる。

「そうだね。これは君と旅行に行ったときにでも問い詰めよう」

嫌な宣告だった。思いなしか、綿蓄の八重歯が光る。私は慌てて言った。

「ま、要するに嫌いだったんだ。奴がさ」

何を要したらそうなるのか、自分でもよく分からない。

「白衣のお爺さん？」

「そうだ。そいつしかいない。あんまり人を嫌いになれる性質じゃないはずなだけだな」

「君の場合。嫌いになれないって言うよりは単に人と干渉をしないだけだよ。だから必要以上に突っ込んでくる彼が鬱陶しかったんじゃないの？」

そうかもしれない。でも、それだけじゃない。

「なんだかんだで、二択しかあの時は考えが及ばなかった。お前か奴かしかさ」

綿蓄は、ふうんと口を尖らせ、まあ今はそういう事でいいか、と両手を頭の後ろに組む。

そして、私達は到着した。

フィナーレには頭数や、歩数や、場数や、心意義。そして何より緊迫感が足りないが。それが、私達を又確証させる要素だ。

かつて、私と彼女は一部の集合体である。

似ている所もあり、そして、違う所もあり。

そう思えば思うほど、やっぱり私達は道端ですれ違った人と人でしかないのだけれど。

運命なんて、そんなもんだ。

頭が勝手に紐と紐を結ぶ。

紐と紐が更に絡み合って。

纏れ合って、解けない。

「彼はね、残念だけど、生きてると思うよ」

「そうか、良かったじゃないか」

「いいや、良くは無いね。僕も嫌いだもん。あんな奴は」

門前に到着し、城壁を背に腰を掛ける。

上を見る限りのコンクリート。日差しは強くない。

今日は夜まで彼女と語り合うのも一興なのかもしれない。

そう思った矢先に城門が開くから、時間というものを私は好きになれないのだ。

出てきたのはウサギと、猫。

二匹は馬車に乗ってやってきた。

片方は、チェンソーを持ち、もう片方は冠を持っている。

どちらも、姿態は完全な人間であるというのに。

やっぱり、ウサギと猫にしか見えない。

猫顔とか、首から上が猫とか、雰囲気猫とか、習性が猫とか、そんな事は一切ないのだけれども、彼は猫であると断言できた。

クロノバは猫だった。

やあ、と私と綿蕾に会釈をする。何度も私達とつるんだ仲の如く、人懐っこく。

綿蕾は言った。

「取りあえず、迅速に僕らを地下から、海から、蜂の巣から、森から、砂漠から、庭園から出して欲しい。今すぐ御家へ帰せ。良い子はもう寝る時間なんだ」

クロノバはにっこりと笑った。

猫顔だった。

そしてシフトキィにクロノバ（前書き）

背後に破壊した挙句、跡形を残していない物質を通過すべくのみに前進した者

無から無を造り、疲れない程度に世に足掻く術を遂行すべく前進した者

自分の行うこと全てが正しいと認知し、他の者を受け付けない為、故に前進した者

歩く理由は様々。しかし行動は同一している。

そして彼らは動機を欲している。潰し合いの内訳を。

そしてシフトキィにクロノバ

「どうしてこんなにも旨いものか。人を目にして飲み干すコーヒーが。まして、ここに都心の赤信号に足を止める小市民の常識がなければ、又、車の下敷きになる者を哀れみ、正解や間違いを説く表示主義もない。食物連鎖がなければ、弱肉強食は有り得ない。此処で命は永延を紡ぐ。生死や正負がなければ交換は要らぬ。お払い箱となったシフトキィが具現化し、今、コーヒーを飲んでみせる。無いものが有るものを形成し、無いはずのものが有るものの事をする。だからこのコーヒーは尚旨い」

クロノバが、手を挙げると其処にティーカップが現れる。その中身を飲んでみせ、そしてカップは再びどこかへと消失した。

「お前達の世界はだな。これの後付。骨に付いた肉の塊でしかない。肉に筋は有っても髄はない。人は死ぬ。時間は有限で、失うものばかりだ」

私の世界には不可能の割合が可能の割合よりも大きい。その事実
は定刻を軸に体に刻まれる。刻まれる時が来る。蝕むように徐々に。
「お前達、一体何が楽しいんだ？」

クロノバは、その顔を歪め、本当に私が、私の世界が怪訝で仕方がないと言わんばかりに目を細め。なあ、と横を向き、ウサギに合意を求めてみる。ウサギは、クロノバを見据え、取り乱す事無くゆつくりと告げる。

「俺様はな。虚偽。虚偽の為。虚偽のみを久遠と演じ続ける事だ」
二度も三度も。演じるべきとき。有為が変転した所で、やる事は
同一している。真意が虚無であろうとも。ウサギは言いたい事を言
ってやりたい事をやり続けるのだろう。

クロノバは、二回、首を回し、さも退屈そうに欠伸を一つし、椅子の上に胡坐をかく。そんなクロノバを見て綿蕾は立ち、馬車に一歩ずつ近づいてゆく。

何を思い立ったのか。そして、綿蕾はこれから、何を思うのだろうか。

彼女の夢は、世界中のコンピュータ、末端という末端。モバイルというモバイル全てをハッキングして、手中に納める事である。

これは、可、不可という単純なものではないよ。暇潰しとも言えるけど、其処にどれだけの思念が有るかで人間の価値って決まるんじゃないかな、なんてね。

過去回想。毎時姿を見せてくれた彼女。幾度も言葉を残してくれた彼女。

どれだけ私の中で、彼女が反芻されただろうか。

言葉。有限なコミュニケーションを繰り返す。それこそ、私へと浸透した何かは宝くじで当選をする。水滴の、猫の涙一粒にも及ばないものかもしれないけれど。又、小さいだけにその価値は大きいのかもしれない。

「弱者が生き続ける理由が知りたいかい？」

綿蕾は、声を細めて囁く。足の無い幽霊の様に左右体を揺らしながら又前へ進む。

「それは罪の購いでも、又、幸福の探索でも、又、難渋の末でもなんでもないんだよ」

罪を償える人なんてこの世にゃいないさ。

幸福は尻尾を振ってやってくるものさ。

苦渋なんて、明日にゃ忘れてるってさ。まして末なら尚更だ。

思い出される。彼女の言葉が再び。

そして、吊り下げられた蛇の様にだらしなく伸びた手を前に突き出す。彼女は何か大きいものを抱えた。まっすぐ顔を上げる。まっすぐ、一点。クロノバを唯、見て話さない。その眼光は今まで、私に一度も見せた事の無い類のものであった。

「それは、単なる仇視ってものさ。何を恨んでいるか。何故恨んでいるか。そんな事はどうだって良い。思いは一つだけ。此処で死んでたまるかよ」

何か、金属が擦れ合う高い音が発された。それは連続的に鳴り続ける。ウサギのチェンソーに電源が入れられたのだ。

ウサギは、クロノバの腕を切り落とした。水道管が割られるのと同様。そこからは大量の血液が上下左右へ、四方八方へと散される。それは、無色透明の水道水よりか、幾らか日光に接触して輝いてみせた。

一方。車輪の轍、若しくは城址かが、一瞬で消されるという怪異な現象が起きた。

一瞬。白くなる頭。

しかし、直に飛び上がる。

綿蕾の腕が、片方。どこかへと消えた。あつたという足跡すら感じられない。しかし、其処から。クロノバと同等の血が流れていった。

私は、彼女の名前を叫び、爆走する。

私が駆け寄ると、綿蕾は、地へ膝を突いた。私は彼女を抱える。

「おい、大丈夫か?!」

「余裕だね。なに、想定内だよ。犠牲が無くちゃ、チェックは出来ない」

何て事を言ってくれるか。

犠牲を考えない結果がこれか？人に散々言っておきながらなんて様なんだしずる。お前の脳髄は一体どうなってるんだよ。それとも天才な彼女は腕や足や首が切断されたぐらいどうってことないってか？アンドロイド？ヒューマノイド？ロボット？確かにお前の統計能力や度量はそれらに匹敵するかもしれないし、それを軽々と凌駕してしまうかもしれない。でも、だからなんだ。お前は生身の人間なんだよ。やって良い事と悪い事があるように、やられて良い事と悪い事ぐらいあるはずだ。

「知らぬとは言わせぬぞ。海と下水のトレース。不幸と幸のトレース。仕事と暇のトレース。時に、カレーを焦げたものへとし、人の形をした顔を馬の顔へとした。これが同等交換ってものだ。その対象が今や崩れ去ろうとしているものだとしても、同じ役を持つものは、それだけの点数棒を持つものだ」

と、クロノバを目の当たりにして私は驚愕した。ウサギも多少仰け反り、狼狽しているのが見て取れる。

「これが彼女の腕か。ふむ。なかなか使い勝手がよさそうではないか。しかし残念だな。折角冠を作ってきてやったと言うのに。まあ、成り上がりのポーンは腐ってもポーンにしかならぬ。つくづく何も変わらぬのだな」

突進。

猛爆。

粉碎。

ウサギを後ろへ強く押し倒し、馬車へ飛び乗る。

クロノバを殴る、蹴る、肩や肘をぶつける。

「ふむ。これは、生前に持つものだ。とても後天的に身につけたとは思えぬ。リーチのみ。ドラ十二。役満。逆、一発退場とでも言うべきだ。一粒で二度も、三度も噛み締められる才能だよ」

クロノバの顔が一度へこみ、そしてもう一度元へ戻る。

それが何度か繰り返され。

少しずつ。自我の体が軋んでいるのが分かる。

交換されている。

同等交換を。

次第に体中が痛み出し意識が朦朧としてくる。

「畜生。死んでたまるかよ！」

叫び、そして、私の身はそこで倒れた。

意中の通りにもものは動かない。
それが、現代の鉄則だ。

起き上がった時。其処は、別世界であった。通過したのがトンネルでなければ、其処は、銀世界では無い。唯の世界。

しかし、それでも真白。

白い壁、白いベット、白いシート、白い服。

其処は、病室であった。

隣を見る。

綿蕾がいた。半身を起こし、整然と書物に耽っている

綿蕾の腕は、無くなっではいなかったが、私の方と言えば、左足をギブスで固められ、右手は捌かれた肉片の様に紐で釣られている。頭にもグルグルと布が巻かれ、インド人の気分である。片目は封じられ、視界が閉ざされていた。

もう片目で、綿蕾をもう一度見る。

何もかもが均等なその顔立ちに似合わぬ異端者。清楚なその表情を見る限りではとても想像は付かないだろうが、時にその一皮を脱げば、アウトロー顔負けの化け物と化す。

お前は何者だったのだ。

そして、私は何者でもなかった。

私の彼女一人救えない、唯の暴走車。

人は轢けても、救えない。

戻ってきたのか？

それとも夢か？

それともまだ、抜けられなかった？

いい。もうどちらでも構わない。

彼女が隣に存続をするのならば。

「あ、お早う。今日は天気が良いね」

と、何気なく。何事も無かった様に。綿蕾は私へ声を掛けてくれる。

「ああ。そうだね、後で散策にでもでかけようか」

綿蕾は寝ている私を覆う様にして、顔と顔を近づける。

「無理だよ、君、今動けないもんね」

彼女は、静かに微笑んで、

「それよりさ、怪我を早く治してよね。まあ旅行は決して逃げる事はないけどさ」

確かに、そう言った。

後日談（前書き）

正道が迂遠して、辿りつけない。
左に三十。右に三十。
迷った挙句に出口が見える。
漸く気付く。

道は無い。

後日談

宇宙空間にまで態々足を運ばなくとも、二人つきりになれる空間など、地球でも多々とある。そうやって綿蓄を正論の名目で説得し、からがら彼女の承諾をやっと得て、漸く私は胸を撫で下ろしたのだった。

「そもそも、宇宙に人気がないのはその空間が人体にとって、とても辛い構造となっているからだぜ」

「って言うか、地球が人間に優しい環境なだけだよね。あはは、そう考えると僕達も中々の甘ったれだよ」

相変わらず無茶を言ってくれる。

そして数カ月後。

終に漸くこの時が来たと、そう心から強く思ったのは、私が長期に渡ってこの時を待ち望んでいたから。……という訳では決してなかった。

入院の間、綿蓄はすっぱんの如く片時すら私から離れる事がなかったのだ。その鬱陶しさといったら、どんな蠅や蚊、どんな長髪、どんな猛暑、どんな梅雨がまとめて私へ食って掛かろうとしてもとてもじゃないが叶わない。

起床！ 寝てると体が鈍るよ。ご飯一人で食べられる？ よし、車椅子持って来たよ、さあ存分に座りたまえ！ あ、花があるねえ、摘んでこようかい？ やっぱり定番は膝枕かな！ 大丈夫？ ベツトに乗れる？ 注射？ なんなら僕が打ってあげようか？ 眩しくない？ カーテン閉めようか？ テレビは九時まで！ 良い子はもう寝ましょう！ 眠れない？ よし子守唄を歌ってあげるよ！ 寂しいなら僕が横で寝てあげても良いよ！

元々、彼女と私じゃ、根本的なテンションの差があるので、こう

も一日中付きまとわれると、それこそコンディションが崩れ、症状が悪化してしまうというものである。しかし、私の体は危惧をしっかりと感じ取った様で、何とか入院期間を半分以下に収める事に成功したのだった。良くやった、マイ、ボディ。ナイス治癒能力。

そうやって、やっと取り戻した健康な体。この身で、早朝に始発の東北新幹線に乗る。だが、電車とは唯座っているだけだというのに、何故こんなにも疲労感が押し寄せてくるのだろうか。否、唯座ってじっとしているからこそ疲れるのであろうが。しかし、乗り物というものは唯一人間がモノとしてカウントされる空間である。モノと死人に口はなし。敢えて細かい事は言わないでおこう。

行き先は北海道であった。ルートは大地だけではないのだから、綿蓄の自家用ヘリコプターを駆使するなり、豪華客船に乗船するなり、手は幾らでもあったはずである。それでも、飛行機さえ使わず、電車を利用したのには理由があった。

「あ、丁度いい所に自転車屋があるね！」

綿蓄は二台のマウンテンバイクを購入。私と彼女は早速それに乗り始めた。

「自転車屋なら、この辺、仰山あるだろう」

私は溜息を吐いた。

電車の中から臨めるビルの森。しかしパズルの如く敷き詰められているというのに、それらには全くの均一性が見受けられなかった。バラバラである。故に見栄えが良くない。見栄えが良くなければ出来栄さえ悪く見えるから不思議だ。

まるで別世界。

私は都会を始めて目にした。

綿蕾の家は山形にあった。

「なあ、せめて出発点は山形にしよう。今からでも遅くないから」

彼女は指を振った。舌を打つのも忘れない。

「駄目だね。無駄に注ぐ思念の量で人間性が決まるんだよ」

断言された。正しくその言葉、一言が無駄の塊であった。

正論は矛盾を生む。

膨大な矛盾を生む。

だから、人間は正論を吐く。

悪循環。されど循環。

回れば生きる。

止まるまで動く。

正論ほど、矛盾を伴うものはない。

こうして、私達の自転車の旅が始まった。スタート地点は東京タ

ワー。ゴールまでの総距離など考えたくも無い。

「なあ、やっぱり東京の観光でいいじゃないか」

「一度聞くは利口者。二度聞くは愚か者」

綿蕾は走り出した。私は彼女の後ろを慌てて付いてゆく。

嗚呼、宇宙空間がなくなったと思ったら、次はこれか。

しかし、私はもう決めてしまったのだ。彼女についてゆくと。

「そういえば、聞かなくちゃね。君が僕を選んだ理由」

「その前に、私から質問が仰山」

「一つだけ聞こう」

「……」

「冗談だよ、どうぞどうぞ。雨でも槍でもかかってきなさんな」

「まず、あの世界の事だが」

「あれれ、要領が抜群に優れた君の事だから、もうてっきり分かってるものかと思ったんだけどな。あれは唯の機械だよ。僕達は機械の中に閉じ込められていたの。だから時間は回らないし、プログラムは首を切られても死なない。それだけ」

綿蕾の解答は私の思索の範囲内にあるものだった。彼女も、何度も言った事だ。しかし、それが本当だったとして、その事実は又謎を呼ぶだけだ。まあ大抵の謎は謎を呼ぶものなのだけれども。

「それじゃあ、何故私が其処へ？」

「そんなの、クロノバが君を引っ張ったからにきまってんじゃないかよ」

「一寸待て、物理的には可能なのか？」

「ああ、ハウダニットか。ネコ型ロボットのポケットと原理は同じだよ。まあ、現実はその入り口の歪みがあること自体が確かに不自然ではあるのだけれどもね。歪みが登場する原理は不可解じゃないよ。こっちの世界のソースをあっちの世界から弄ればいいんだ。勿

論、文字や記号そのものが相違しているし、こっちはこっちで、別の制御機能があるからさ。それを成せるのはハッカーのクロノバぐらいだったんだろうけれどもね」

「おい。もしそうだとしたら、しずるの了見は十中八九ほど当たってたんじゃないのか？」

「それは、クロノバも言ってたじゃんか。この世はあれの後付だったさ」

「まさか……」

あの世界が本物で、これは偽者だというのか。

しかし、確かに彼女の言うとおり、この世の現象は全てコンピュータプログラムで説明がつくのは事実なのだろう。だとしたら、可笑しい話ではない。

この世が、コンピュータから作られた世界だとしても。

「それじゃあ、クロノバって何なんだよ」

「だから、それも彼は言ってたよ。不必要となったシフトキイが、形而上の何かが現実には形として現れたの。ああ、でもこの辺は説明が必要かな」

「是非して欲しいものだね」

「例えばあのウサギちゃん。あれはこの世界から産まれた生物なんだよね。同じように、クロノバも此処で産まれたんだよ」

「なんだって？」

「ウサギの誕生は君の想像通り、普通に産まれた生命体だ。しかし、クロノバは全然違う。あれは、この世では確かに物質だった。シフトキイでしかなかったんだよ」

「つまり、クロノバがあっちに行った事によって命を持ったということか？」

「うん。少し語弊があるけど、まあ粗方そうかな」

「だとしたら尚更可笑しい。物質は足を持たない。どうやってあっちへ行ったのだ」

「ウサギが運んでいった。否、君が連れて行ったというべきか……」

「訳が分からん」

「君はそうだろうね。でも第三者の僕には手に取るように分かったやうんだ」

そこで、綿蕾は呼吸を整える。

「少しあそこで休もうか」

と、指を刺したのは大きな大木であった。しかし、以前に見た、山形の山と山の狭間にあった、とある大木とは天地の差が感じられた。

これは公園の一つの木。あの大木とは違う。

その木の下に寝そべる。

土で服が汚れた。日陰にもならない。風もない。

「ウサギは何故、あの世界にいたのかね」

「それは僕も少し腑に落ちない部分なんだよね。ただ……若しかすると君に会いたかったんじゃないのかな？」

「ふん。冗談じゃないな」

「そうだね。冗談じゃあないよね」

「私が出た魚も蜂も大木も馬も、全てクロノバの下命で動いていたのか？」

「どうだろうね。別にクロノバには何にも言われちゃいないとは思うけどさ、クロノバにシフトされていた以上は、皆も犠牲者と言えるのかな」

「じゃあ、ウサギも、クロノバにシフトされて此処に連れてこられたんじゃ」

「それはない。言ったよね。クロノバはウサギが持ってきたの」

「でも、それじゃあ順番がアベコベだろう」

「そうだね。君、ウサギ、クロノバ。これじゃあ全く逆だ」

「おいおい、私がクロノバに引っ張られたんじゃないのか？」

「うん。現実的にはAもBもCすらあるはずがない」

「説明になってない。まさか、本当の所お前も全然分かってないんじゃないのか？」

「半分は、そうだと思う」

「つまり、全部予測って事か？」

「それは、良く分からない」

「いい加減にしろよ、分かるか、分からないのかはつきりしてくれ」
「後一つなんだ。もう一つ答えが分かれば、其処から紐が解かれるのだけれども……せめてウサギちゃんに会えればな。でも、ウサギちゃんも何処まで自分の行動を自覚しているのだろう。それによって又話が変わってくる……」

「分かった分かった。それじゃあ、私は、クロノバに。ウサギは私に。クロノバは、ウサギにそれぞれ手を引っ張られたって事だな」
「いいや、それじゃあ不可解だ。しかし、此処である仮説を一つすれば、これは可能となる」

「仮説？」

「そう。どれかが二つあれば、この話の説明が全て付く。君が二人いるのはまずないとして、多分、ウサギかクロノバが二つ以上。多分クロノバだろうな。シフトキイは一つじゃないんだ」

「あ……」

東と西に一つずつ。

此処からだ東のクロノバだな！

思い出されるウサギの台詞。

ウサギが片方を持っていたとすれば、クロノバが二つある事は知っていた？

「いや、しかし、もしそうだとしたら、あの世界にシフトキイが元来二つあった事となる」

「それは違うよ。あの世界にシフトキイは存在しなかった。しかし、唯一同等のものがあった。それがクロノバだ」

「何？　どういうことだ？」

「シフトキイが、クロノバをシフトして、シフトキイを二つにした。その際にその二つがそれぞれクロノバを名乗った」

「じゃあ、私をあの世界へ強制送還させたのは、シフトキイじゃな

いんだな」

「そう。だけど、本家本元のクロノバはもういない。彼の思惑なんて、一生の謎だね」

「そうか……」

綿蕾が再び自転車へ乗った。

県を二つぐらい飛び越えた所で、高速道路を見つけ、その脇を走る。途中、トラックとすれ違う度に彼女の髪が大きく舞い上がらせた。風はあるが、空気は悪い。

まだ、足りない。

「クロノバは、どうして私達を帰してくれたのだろう」

「最後、滅茶苦茶に彼を殴ったでしょ？」

「ああ、全然堪えてはいなかったがな」

「初めてだったんでしょ、ある存在が満身創痍になっている所を見るのが。だから、それが新鮮で、壊したくは無かったんじゃない？」

「しかし、シフトキイは元々この世界の物で……、ん？そうか。あのクロノバはシフトされた方のクロノバか」

東の端の冠師。

訪れた旅人に冠を配る。

その冠を手にした旅人は、

見る見るうちに女王となった。

北海道は、まだ遠い。

其処へ向かう旅人が。

最後に何を得るのか。

楽しみだった。

「あゝあ、これ到着するのに何日かかるかな」

「しずるが執事を使ってヘリコプターを呼べばあっという間だ」

しずるは、声を出して笑った。

「二度目は愚か者。されど三度目は果報者」

もう一度訊いてやろうか。考え、すぐに思い止まる。

四度目は臆病者。

そう罵られるに違いない。

今は旅の事だけを思考しよう。

終わり。

後日談（後書き）

正論が矛盾を生む。
矛盾が増え続ける。
そう思い込んでいる。
それが続いている。
何時までも続いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8831a/>

シフトキィにクロノバ

2010年10月8日15時48分発行